

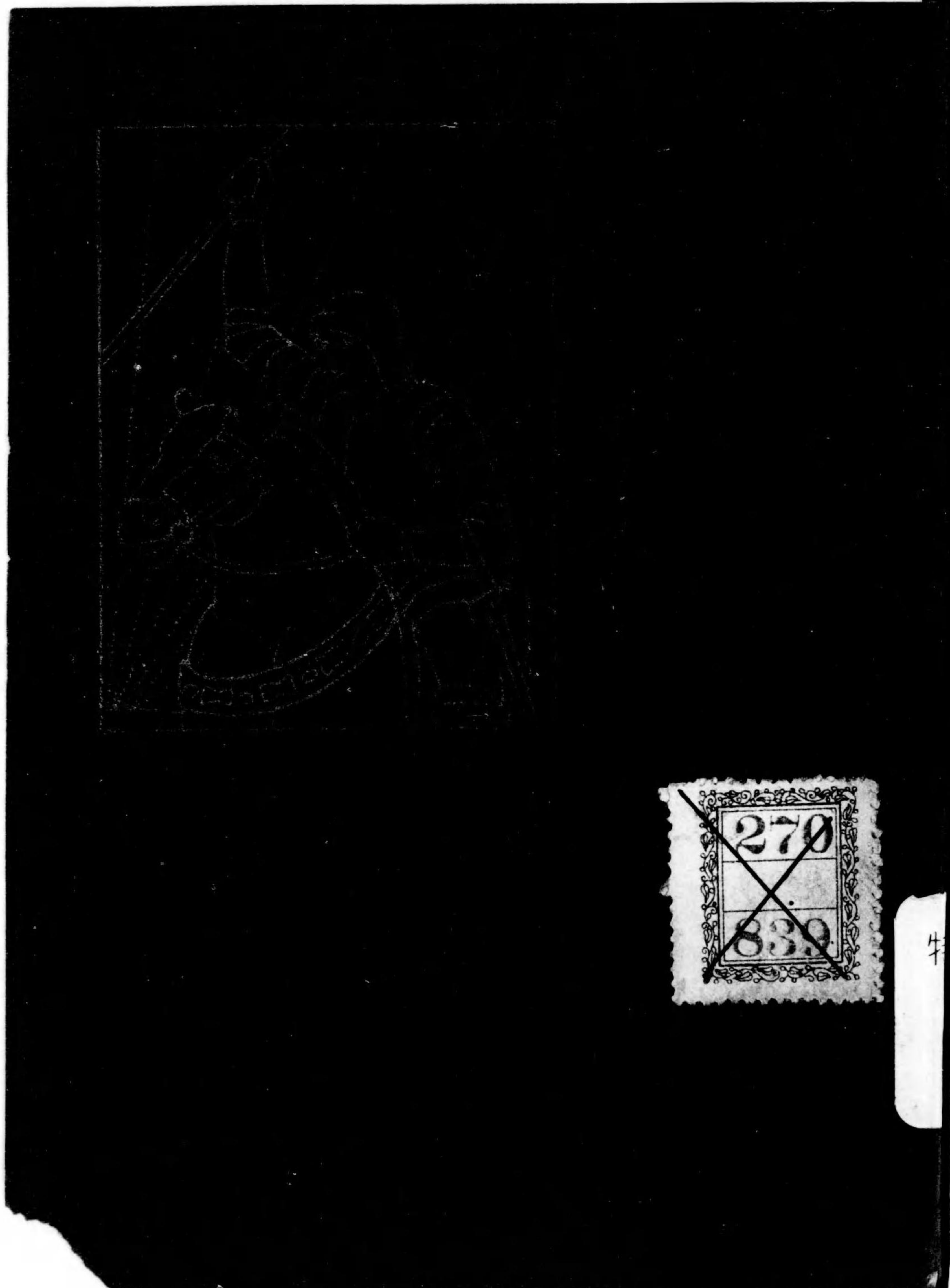
始

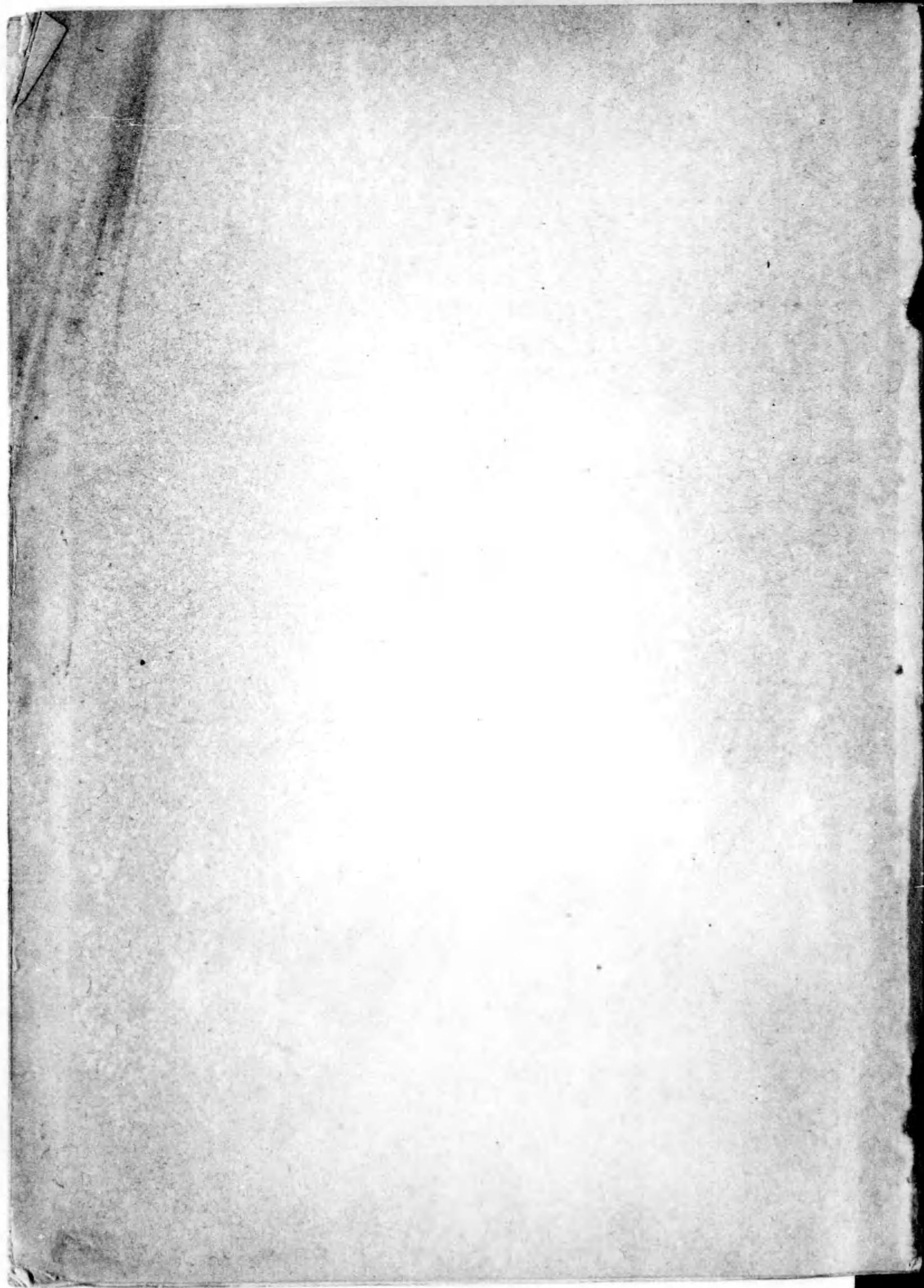


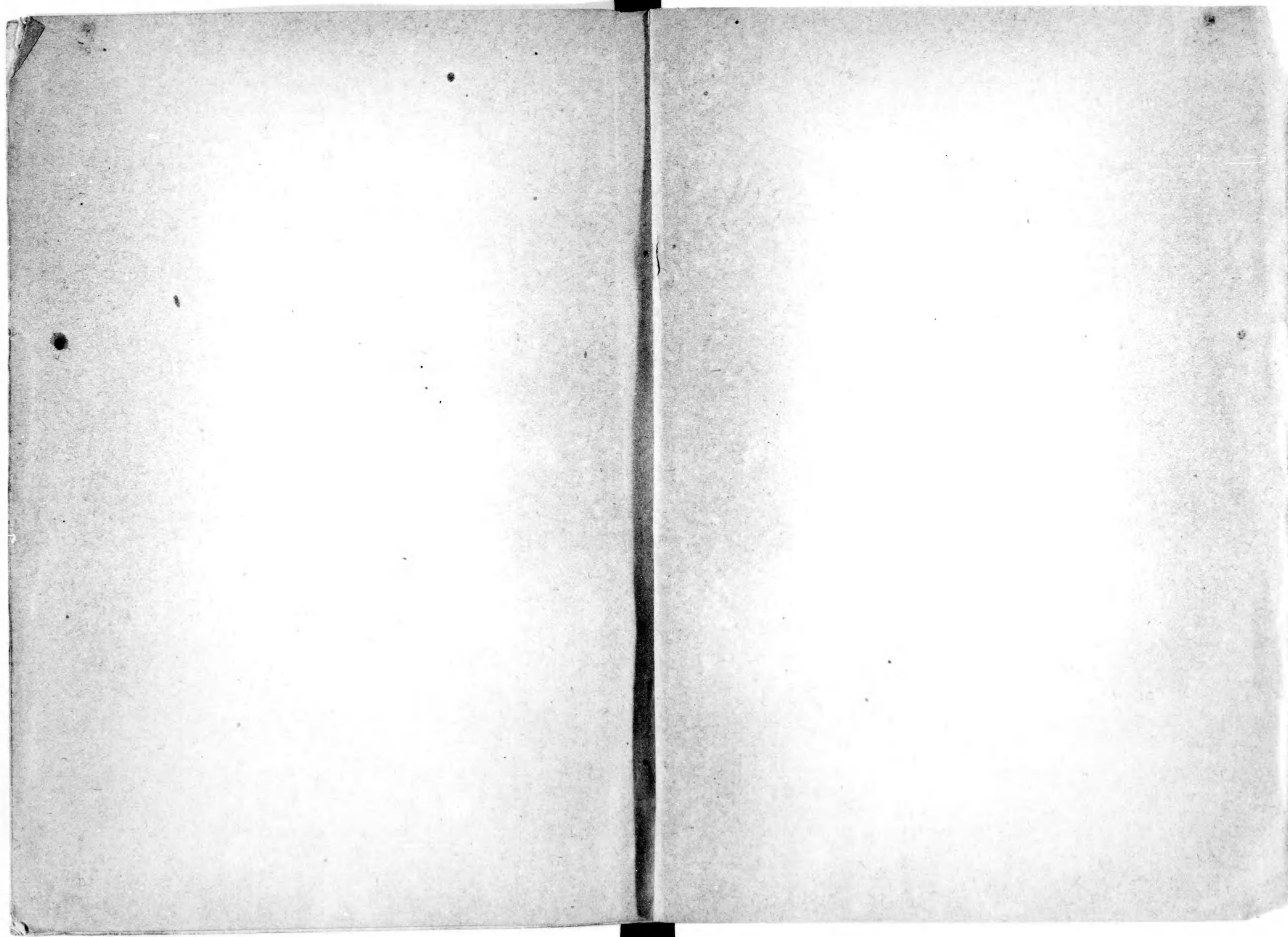
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25



牛







持100

157



小
山
大
浦

著 正

2. 4. 8

内交

わが妻に

目次

序

- 一、予は佛陀より基督に往けり…………… 一―四二頁
- 二、死の一線を超えたる生の宗教…………… 四四―六二頁
- 三、目を閉ぢよ…………… 六六―八六頁
- 四、眼を開け…………… 八八―一〇六頁
- 五、本來の我…………… 一〇八―一二三頁
- 六、萬有と神…………… 一二四―一三八頁
- 七、耶蘇の人格と生命の創造…………… 一四〇―一五四頁
- 八、自然詩人を憶ふ…………… 一五六―一七二頁

序

向日葵は太陽を戀ひ、月見草は夜色を愛す。草木尙ほ情あり、皆光を慕ひて生く。況んや人間に於てをや。誠にヘルデルの Licht, Liebe und Leben と言ひけむ如く、光なくば愛なく、愛なくば生あらず。吾等は光を慕ひて生く。然り眞實に生きむと欲して、吾等は永遠の光に憧る。總ての煩悶と健闘と慰藉とは自ら此中に在り。光とは何ぞや、生の意義と價值とに關する徹底的信仰是れ也。實に吾等は最早生の理由を知る事なしには、到底

生を繼續し得ざる也。光は吾等の生其者にてある也。此小冊子は最近數年間に於ける予が精神的實驗の告白也、記録也。語りて審かならず、説いて精しからざるは、予自身の不満とする所なるも、若し予が信念にして空しき幻影に非すとせば、神は必ず本書を通して何等かの光明を江湖に頒ち給ふならむ。

本書の最後に收めたる「自然詩人を憶ふ」の一文は六七年前の舊稿なるも其他の七篇は皆最近約一年間に於て「六合雜誌」、「基督教世界」、「新人」、「開拓者」等に掲げし者なり。

大正維新の春

鼎 浦 學 人

予は佛陀より基督に往けり

一 予は樂園を失へり

予は久しく靈肉一如の思想を抱きて、全人の生活に憧れたりき。全人生活とは何ぞや、そは靈と肉との融合調和に於て、健全にして豊富なる人生の理想を見出せるなりき。そは總て人間に屬けるものは神に屬ける者と一樣の價值ありと爲せるなりき。そは肉を外にして靈は無く、ヒューマニチーの中にこそ、デビニチーも存する者なるが故に、人は靈肉の此身此儘神の子の光榮を有すと認めたるなりき。即ち揚言して曰く、あるが儘なる自己内容

の全局を開顯して、そこにあらまほしき人生美の華實を悦樂せんとす。樂園現前、彼岸眼頭の消息こゝに在りと。げにも美しき樂園の夢なりし哉、若し予にして在るがまゝなる自己内容の中より人生美の華實を開發し得たらむには、眞に至福と謂ふべかりしならん。されど茲に所謂全人の生活は、予に於て單なる理想の幻影なりき。煩惱の肉身此儘にして、本然の美德を開顯せんとは揚言したる者の、如何せん予は猶ほ煩惱の故を以て、慘たる苦痛を嘗むるに非ずや。人間自然の欲求は、遠離すべきにあらずして、統制し發展すべき者といへど、誰か實驗に

鑑みて、言ふの易く行ふの難きを歎かざらん。愚かなりし哉予は、今に及んで漸く全人的思惟法の、終に人生を惡の苦痛より救ひ得ざるを悟了せり。予は全人を以て、靈と肉、主觀と客觀、自愛と他愛、主我と無我、理想と現實、其他一切の人生經驗に於ける矛盾分子を歸一する者とし、名けて中道の行者と言ひき。而かも今よりして之を思へば、當時の予は猶ほ折衷主義者の亞流を脱却し得ざりし也。眞に心的經驗の兩端を統制せんが爲めに、予は一層根本的徹底的なる超越道を發見するの必要ありし也。而かも予が眼は猶ほ未だ開かれざりき、予は全人

の理想を捉ふるに至つて、竊かに新しき生活の之より始るを期したりしが、恐くは是れ古き生活の最後の耀きなりけむか、予自らは之を知らず。唯予は樂園の夢半ばにして、紫電の光に驚かされたり。あはれ全人生活の理想は、果して徹底の悟得なりし乎。

二 生の肯定と其の悲哀

予は今に至りて全人の理想を弊履の如く捨てんとする者には非ず、されど其不徹底を看破し來つては、斷然之を一擲し去るも、別に惜しむ可き所以を見ず。全人は生

存の肯定者なりき、全人は人性の謳歌者なりき。而して予は實に全人の理想より急轉直下、生存を否定し、人性を呪咀するの深酷なる苦悶を味へる者也。予は予が復活を語る前に、急轉直下の因縁を少しく告白せざる可からず。

予は始め全人の態度を説いて、彼岸を有無の過境に見ず眼頭實有の世界に眺むと言へり。げにも是れ第一の謬見なりき。否、此世界の半面を見て、他の半面を忘却したる近視眼的見解なりき。予は又全人は天性の流露の中に、人格美の開発を樂しむと言へり。是れ將た第二の謬

見なりき。否、此人性の半面を見て他の半面を閑却したる偽善者的放言とも言ふ可かりき。予はデルファイの城門に書かれし「汝自身を知れ」の一語を色讀すること餘りに遅かりし。殊に予は予が心中の欲望其者に於て、自ら知る所極めて淺薄なりき。嘗つて予は論じて曰ひぬ、「全人は生の悅樂を重んじ、之を最高處、最強處、最深處に於て充實せんとする故に、茲に妙智慧眼を開いて意志の活動を導く。慧眼一たび開けば、假令諸の欲求起りて、意志の尖頭に狂ふとも、全人は巧に之を調御し得て、些の困惑をも感せざるなり」と。あゝ談何すれぞ斯くも容易な

りし、慧眼一たび開けばてふ其根本の自得こそは、眞に人生の一大事に非ずや。此自得を確かに捕捉し來つて、始めて諸欲の肯定を説くべし。飢えたる虎狼の如き欲情の爲めに苦悶を脱し得ざる凡夫の身にして、之れを敢へてするも如何せん。予の理性は全人の思惟法を辿りつゝも、予の人格は猶ほ依然として盲目なる一個の放浪兒なりき。

一切の生欲を肯定したる予は、一切の生欲の爲めに惱まされぬ。斯の如き經驗は果して予一個人に限られたる特殊の苦痛に過ぎざる乎。予は屢々之を思ひ惑へり。され

ど古聖先哲の深酷なる事蹟を顧みれば、予が嘗めたりし苦痛の如きは、餘りに淺く甘かりしならむ。——予は予が煩惱の子たりしを寧ろ我が神に感謝せむ、棘の痛みを覺えずんば、救ひの喜びにも逢はざりしならむ——予は先づ第一に予が欲望の無限無際なるに困しみたり。予は元來趣味の狭からぬを寧ろ憂ひとしたりしが故に、千種萬様の意欲奔馬の如く狂ひ來つては、その取捨選擇に苦しんで、屢々悔恨を遺すに至りぬ。われは是れ第一義生活の憧憬者にあらずや。柳緑花紅種々雜多なる欲望の誘ふがまゝに轉々し行かば、個々の欲望は之を充實し得んも、

果して何處にか徹底の満足あるべき。予が諸の生欲を總て活かさんと欲しつゝ、猶ほ満足し得ざる胸中無限の空虚あり無涯の貪欲あるを見ては且つ驚き且つ怖れぬ。欲望の予を苦しめたるは第二には其強烈なる性情なりき。予は曩きに生の悦樂を重んじて、之を最高度、最強度、最深處に於て充實せんと言ひぬ。而かも予は未だ最高の價值あり最深の意義ある欲望の何たるやを自ら知らざりしに、唯諸欲の皆共に孰れを何れと判じ難き強度を以て躍現し來るを知るのみ。欲望の強烈なる者に至つては、生命を養ひ強うして、其内容を豊富にするよりも、却つ

て生命の力を弱め、之を衰滅に歸せしむる無からず。げにも水に渴する者は水の爲めに病み食に飢えたる者は食の爲めに苦しみ、金を求めては金に溺れ、名を求めては名に溺るゝ孰れ人界の常態に非ずや。予は悚然として恐れ戦けり。而かも第三に予が欲望の爲めに苦しめるは、之が充足と共に生ずる一種言ふ可からざる悲哀と不満とに在りき。如何なる快樂か之を味ふこと能く久しきを得る者ぞ。之を満足し得て後ち、何とては無く果敢なげなる一種の哀感を催すか、若くは更により深く大なる快樂に徹せんとする不平不満を覺ゆるか、二者其一つを出で

ずして、眞に生き甲斐ありと感ずる快樂とては決して多しと言ふ可からず。欲望の性質斯の如きを洞察し來つて予は終に一切の生欲を超越したる或物を欣求するの情に堪へず、彼の肉に就ける欲求の總てに對して、漸く嫌厭の心を生じぬ。

あはれ全人たらんとするの誇りは、倏忽にして土崩瓦解し終れり。眞に自己を知りし今、嘗めたる杯は極めて苦かりき。全人の美しき夢より醒めて予はうたてくも自知の悲哀に撲たれぬ。而して深くも疑ひ思へらく、生の味ひに徹底せん、さらば欲望を如何かせんと。嗚呼是

れ予が苦心の根本問題なりき。

三 解脱の要求

われに意欲あり故にわれ生く、欲は即ち人也。予は欲望の爲めに深き悩みを感じつゝも猶ほ未だ之を脱離せんとするの、不合理にして且つ不可能なるを信じたり。さらば予は心に痛く苦しみ歎きつゝ、強ひても慾の重荷を負うて一生趨らざる可からざるか。

予は茲に至りて思へらく、意欲ありて人生あり而かも人生の平安が求めて與へらるべしとせば、予は須らく欲

望の種類を詳かにし、取捨の標準を明かにせざる可からず、此事幸に可能ならば、予は幸に欲望を制馭し得て、自ら苦しまざるを得んかど。予は如何に欲望を分析したりし乎。曰く生きむとするの欲、曰く生を充實せんとするの欲、曰く何物をか創造せんとするの欲、曰く全的に自由ならむとするの欲、曰く而して特に何よりも先づ内的に自由ならむとするの欲。然り予は斯く自己を内省し來りて、心が夫れ自ら内的に自由ならんとする解脱の要求こそ、最深最奥の大欲なりと爲すに至りぬ、思へらく自己の内的自由を得ずんば、假令人文一切の興味を攝取

し盡し、又わが才能の創造し得べき最善の事業を爲し得たりとも、自己は猶ほ是れ憐れむべき繫縛の人たるを脱し得可からず。之に反して身は貧賤に居し病弱に處するとも、一心淡々、鳥の大空に舞ふが如くんば、殆んど是れ自主自由の帝王生活なり。富貴權勢は浮雲の如からむも、内的自由の享樂は、永しへに人を活かしむるを見よ。内的自由の要求とは、即ち解脱欲是れ。古今東西の宗教的人物は、皆此種の大欲の燃ゆるが如き人々なりき。彼等は如何にしてか此の大欲を満足せしめ得たる。歴史的宗教の萬世不壞なる價值は、實に茲に光耀する也、わが

最深最奥の要求は、畢竟古聖の證悟したる此の内的自由
に在りと。

予は斯の如く觀じ來りて、切に内的自由を得るの道を
新に發見せんと欲しぬ。解脱の要求を外にして、予は何
物も欲しからず、あはれ此の心の繫縛より我を解き放つ
者は誰ぞ。予は斯く叫び斯く祈りて止まざりき。

四 予は佛弟子となりぬ

予は洗禮を受けて既に十年の久しきを経たり、而かも
己が信の進まざる何ぞ斯くばかり甚しかりし。予は神と

基督とに就て思索し議論し研究したりき。而かも神と基
督とが此のわが活ける靈魂に對する深く親しき關係に就
ては、實驗極めて淺かりし也。否今よりして之を顧みれ
ば、神の恵み基督の愛わが身に足れるに拘らず、わが心
鈍くわが眼味く、全心全靈を開いて之を享け容るゝ事能
はざりし也。神は此愚かなる予を棄て給はず、徐ろに救
ひの道に導き給ひぬ。神の攝理は奇しき哉、予をして明
かに耶蘇の榮光を知らしむ可く、彼は見えざる御手を翳
して、先づ予を釋尊の前に送り給ひぬ。その時予は之を
知らざりしも、今にして攝理の測り難きを想へば、驚歎

の情禁じ難きを覺ゆる也。

然り、解脱を願ふの志は端なくも釋迦牟尼佛の生涯を、予が眼頭に髣髴せしめたり、予は嘗つて屢々釋迦傳を讀み、又大小二乗の教理に就て、多少聽く所無きにあらざりしも、二千五百年前の印度に生きて、乞食の如くに托鉢したりし寂靜涅槃の證悟者と生の悅樂を歡べる予とは因縁餘りに薄かりき。予は從來一たびも、彼と我と同じ世界の空氣を吸ひ、同じ人類の血を分ちたる兄弟の心地を覚えざりき。思ひきや此世此時にして、端なくも活ける釋尊を眼前に新しく發見せんとは。

あはれ一國の儲君として迦比羅城中に生ひ立ちし賢く健かなる年少の太子は、何故に宮殿の榮華を捨て、山林の行者とはなりたりし乎。彼は當時の學問藝能に於て全き教養を受けたりしならむ。彼は五欲の快樂に於て殆んど満さざる者無かりしならむ。彼は婆羅門の感化によりて、厭世の心を養ひたりとするも、同時に妻子の愛によりて人生の悅樂を味ひしなり。即ち彼も亦一時は、靈と肉との二主に仕ふる全人たるを喜びしならん。而かも彼は五欲の生活を見ること、宛ら癩病者がその病苦を厭忌する如くなりき、終に一切の恩愛を棄て、彼は出家の

身となりぬ。思ふに彼が二十九年の生涯は、五欲充實の生活なりき、而かも五欲に慊らざる一點の靈火を懷きし彼は、却て之が爲めに惱みたり。彼が煩悶の根本問題は、全く欲望問題なりき。彼は既に五欲の甘さを知りぬ、之を棄捨せんと決意する前には、幾度か逡巡したりしならん。されば彼は五欲の繫縛を脱せずんば、到底安心の得難きを思ひ、奮つて之を棄捨したり。げにも白馬韃陟の一超飛躍は、彼が解脱の第一歩なりき。彼は出家の一刹那に於て、三十年の生涯を全く埋葬し終れる也。彼は肯定の道を棄て、之より否定の道に入れり。此時彼は死し

たるなり。而して命數無窮なる釋尊はこゝに生れいでぬ。嗚呼彼は果して二千五百年前の一太子たり一沙門たり一覺者たるに止るべきか。彼が沈痛なる五欲の歎き、熱烈なる聖求の志は、現代の子の胸底にすら、強き鋭き共鳴を起さずしては止まざるに非ずや。吾等現代に生くる者の惱むは同じ欲望問題なり。あはれ少くとも予一個人は、之が爲に悶え之が爲に苦しみ、三十年の生涯を人知れぬ不安に送たり。願くば太子の跡を追ふて、山林靜座の友たらんとは、予が心の奥底より湧き出でし新しき熱望なりき。斯く感じたる其時より、予も亦佛弟子の一人なり

りと自ら許すに至りたり。

釋尊は生の歡樂を棄て、而して終に不滅の生を得たり、何處にか不滅の生を得たる、渴愛我欲の滅し盡したる處に於て之を得たりしに非ずや。解脱の第一要務は、確に我欲の滅盡に在りき。我欲を滅盡して始めて現身超絶無餘絶對の不滅界に入る、釋尊は其實證者也。噫、是の如き正覺の聖者こそは、予が久しく思慕して止まざりし內的自由の證悟者に非ずや。予は嘗つて全人たらむと志しぬ、而かも生の醜陋味に徹せんには、生の歡樂を棄捨するの眞に止む可からざるを想ふ。あはれ劣根予の如きも、

迦比羅城中の賢太子と心臟の鼓動を等しうする聖求の熱血漢に非ずや。太子と共に悶え太子と共に苦しめる末世の一行者には非ずや。さらば太子が踏み行きし道、然り否定の道を辿りて、そこに不滅の世界を見むとは、予が新しき憧憬なりき。

五 久遠の故郷に往く

予が喜んで佛弟子となりしは、諸欲滅盡現身超絶の心境を戀へるが故也。而して釋尊其人は、此念願の可能を示し、菩提を求むる總ての行者に、久遠眞實の保證を與

へぬ。予は此保證を信じて蕩進せんと志したり。

多欲予の如きもの果して諸欲を滅盡し得べきや否や予は幾度か疑ひ迷ひたるも、終に其可能を確信するに至れり。諸欲多岐なりと雖ども、食欲、性欲、名譽の欲、功利の欲に優りて、吾等を捉ふる者はあらず。予はその一つ一つに就て、本來の價値を評量し始めたり、而して久遠眞實なる生の光明の前には、名譽も、功利も、肉の快樂も、總て死灰に均しきを感じ、且つは一切の欲其者が不滅の實在に對照し來れば、畢竟幻華泡影に過ぎざるを想ひ、先づ斯く智慧の證悟によりて、一切の生欲を空了

したり。予は智慧の證悟を力として、幾多心海の波瀾を越え、益々諸欲滅盡の妙味を感じ、其心境を愛慕するに至りぬ。諸欲を滅盡して、心境淡々たり、欲の主體を我と言はれ、既に諸欲を空了し諸欲の本源を空了したる今となりては、無欲境は即ち無我境なり。あはれ無我境の慕はしさよ、予は久しく無我の一語に惑ひしが、今にしてその甚深なる實驗の流露なるを悟りぬ。此心境に入りて始めて青天一碧、光明遍照の新らしき世界に入る。ここに新らしき世界とは、煩惱を滅盡したる涅槃寂靜の靈覺眞心なり。そこには「風も吹かず、流も流れず。有胎も

生せず、日月も出没せず、即ち是れ無爲の世界なり。こゝに至りては單に諸欲の滅盡せるに止らずして、一切の意識も亦滅盡す。即ち餘す所唯無記あるのみ。般若空觀の極致は畢竟こゝに在るべし。予は無欲境の觀想より進んで茲に直入し、松林靜座の間、幾たびか光明に觸れ得たり。一心靜觀、能く此境に透徹せば最早諸の意識の在るを知らず、奚んぞ自我の意識なる者あらんや。既に意識を超越す、何ぞ個々の欲望なる者あらんや。識欲共に滅す、如何にしてか我ありや無しやを知らん。我ありと言はんも愚か也、我無しと言はんも未だ盡さず、

未だ盡さずといへども此心境を言ひ現さむには、無我といひ、無作といひ無爲といふより外に適當なる言語ありとも覺えず。是れ實に否定の道を行き盡して、窮竟の否定に達したる、否、最後唯一の肯定に逢著したる刹那の實驗なれば也。無我といひ無爲と言はずして、何等か積極的の言語を用るば、恐らく否定の極致たる此眞實實在の意義を透徹せしむる能はざらん。予は佛徒が窮竟の實在を味ひ、之を無爲涅槃と名づけたりし心事に全く同感を表す。諸欲を滅盡し、現身を超絶して、自照靈然たる妙境に高擧し、こゝに一切空と叫ぶ、是れ豈に理義の能

く到達し得る處ならんや、唯心證體讀する者のみ箇中の消息に通ずるを得ん。一切空と聽いて、且つ驚き且つ憂ふる凡眼常識の輩は未だ佛徒を解すと謂ふ可からざる也。予は否定の道の窮る處、空觀に入りて自ら止んぬ。久しく金剛經の愛讀者なりし予は、釋尊の根本佛教より、ここに一超直入するの法緣既に淺からざりし也。一切空の無爲境よ、是れ豈に我等が久遠の故郷に非ずや、不生不滅の我は、唯長しへに此處に在らむ。

げにも予は三十年來の教養智識を棄て、絶學無爲の人とはならんとす也。回光返照の退歩を學び來つて、身

心やゝに脱落せんとす。我とわが藻ぬけの殻を顧みて、一喝「永遠の否定」と叫ぶ。噫、予は斯くして生きながら既に死の國の關門に立てり、否、死の國の關門を奮つて一超々過したり。

六 無爲境の見神感

釋尊は否定の道を進んで終に不滅界に觸れ、人類の未だ嘗つて見ず逢はざりし「永遠の肯定」を發見したる者なれども、偏に消極的言語を用ゐて「永遠の否定」を説くに専らなりしは、決して單に衆生の機根に應せし善巧方便と解

すべきにあらず、彼は自ら踏み來し跡を顧み、且つ自ら到り盡せし境を思ふて、最後の否定を與ふるより外に、發す可き一語とても無かりしならん。是れ全く超絶境也、彼岸也、積極的の形容語は多くは六感の聯想を伴ふて、此眞實境を髣髴し難からしむ。釋尊が諸行無常、諸法無我の二大法印より進んで、無爲涅槃の無上正覺を説破するを主とし、その積極的内容に就ては、多く言ふ處無きに似たる者、蓋し甚深の意義ありと謂つ可き也。彼が用ゐたりし言語の形式に拘泥して、その無爲涅槃を虚無とのみ斷じ去るが如きは、學者にもあれ佛徒にもあれ、決

して釋尊の正意を汲める妥當の見解と謂ふ可からず、予は佛弟子の一人として、斯く揚言して憚らざる可き自らの證悟を有する者なり。況んや心解脱の四目の中、特に第一の四無量、即ち慈愛、憐愍、喜悅、平靜の心を無限に擴大する修養の如き、明かに解脱の心境に於ける積極的意義を發露する者にして、釋尊が轉法輪の間、絶えず之を高調し給へるに於てをや。又況んや後世の大乘諸經に至りては、一見無常無我の法印を破して、直ちに常樂我淨と説き、以て佛説の猶ほ未だ顯はすに及ばざりし眞實々相を開發したりしに於てをや。特に況んや釋尊其人

が、色身を以て無爲の涅槃を示し、一切空の眞實境は、最早見るべく知り得べき端嚴美妙の人格として、吾等の前に存在するに於てをや。

誰か涅槃を虚無とは曰ふ、涅槃は無上の法に非ずや、而して釋尊其人こそは法を體得し法を身とする如來にあらずや。釋尊は智慧の證悟に依り、現身にして法身たり、法身として衆生濟度の慈悲心を發起し給ひたりき。あはれ人天共に歎美せよかし、佛は即ち大慈悲心是れ、而して釋尊其人こそは實にその權化也顯現也。あゝ予が始めに佛弟子となりしは、諸欲滅盡、現身超絶の心境を戀へ

るなりと言ひしは、猶ほ未だ言ひ盡せる者にあらざりき。吾等一切の衆生は、大慈大悲の雨露に濕ふ一莖の藥草に過ぎざる者なり。釋尊の慈顔に對する時、吾等は唯感謝あるのみ、讚仰あるのみ、自ら解脱すと言はんは廣言に過ぎたり、釋尊ありしが故に吾等に解脱の確信もありき。吾等は彼が大正覺を信じ、之を力とし之を歸依とし、奮つて向上の一路を辿りぬ。さらば吾等は自ら解脱すと言はんよりも、釋尊の爲めに救はるといふの一層適切なるに若かじ。げにも彼は正覺の眞人、人天の師親なりと謂ふに止らず、吾等が心靈の救濟者にてありき。少くとも

予の信眼に映ずる釋尊は當に是の如きの人なりき。然り、彼は法身の如來なり、如より來りし人、如として來りし人、人にして同時に超人、現在の人にして同時に久遠の人、彼を見る者は法を見、眞如を見、無上涅槃を見、不滅界を見、現實世界の中に内住して、且つその上に超越せる最高實在を見る者なり。

噫、予は茲に至りて何とか言はん。予が釋尊に對する信は、予をして最高實在を端的に直視せしむるに非らずや。げにも尊き最高實在よ、空にして實なる永遠のザインよ、不生にして不滅なる無窮のウエルデンよ、光の源

よ、命の泉よ、無上靈覺の主なる神よ、人類の言語は多かれど、爾を神と呼ぶより外に、適はしき言語はありとも覺えず。あはれ予は解脱を戀ひて而して恩寵に觸れ、無爲の涅槃に憧れて而して久遠の生命に逢ひ、一切空と悟りて而して無盡藏なる實在界に入りぬ。予は無爲涅槃のたゞ中に於て、佛陀讚仰のたゞ中に於て、明かに本地の風光を見たり、否、靈覺の眞心を見たり、否、否、予は確かに神を見たる也。

あはれ慕はしきわが神よ、わが眼開いて「わが神よ」と心に叫びし刹那、驚くべきかな畏るべき哉、天も地も忽

ち新しくなりぬ。わが身は碧瑠璃の青空を見、わが肌は柔き南風に觸れ、わが心は初夏の光に感じて、宛ら生れ更れるに似たり。あゝ靈魂の復活といふはかゝる刹那の經驗なるか。予は「わが神よ」と叫びし時、然り、信に入りてこゝに始めて心の奥の底なき深みより新に神を見出せし時、純真無垢の「われ」てふものが、靈彩燦然たるを覺えぬ。こゝに至りて過ぎ來し道を顧みれば、物皆すべて奇蹟也。

七 予は終に基督信者なり

わが神よ、わが父よ、爾の攝理は奇しき哉、眼味く心頑くなりし予は解脱を求めて涅槃に入り、涅槃に入りて而して圖らずも爾の光に逢ひぬ。爾に逢うて「わが神よ」と思はず叫びたりし其刹那、わが斯く叫ぶより以前に、久遠の淵より來るが如き爾の深く幽けき聲の、わが名を呼ぶを感ずるは如何に。あゝ爾はそも何物ぞや。

あはれ吾等が證悟し得る最高の實在、吾等が感受し得る最高の價值、吾等が心靈の奥底に於て一切の否定を絶したる唯一の肯定、然り最高靈覺の本體其者を自得せずして、神を有りといひ無しといふ閑葛籐に囚はるゝは誰

ぞや。吾等は神の有無を論ずる前に、知らざる神を知らざる可からず、見えざる神を見ざる可からず、然り先づ神を求めざる可からざる也。予は求めぬ而して與へられぬ。夙に天地の神を信じて而かも徹底の自得なかりし予は、一たび近世思想の自我に歸りて、爰に新しき立脚地を求めしが、全人の思想を春の夜の夢と感じて、一超飛躍、釋尊の踏み行きし跡を趁ひ、而して終に涅槃のたゞ中に、わが神を發見し得たる也。——こゝに至りて圖らずナザレの耶蘇を顧みるに、あゝ彼が品性と生涯と思想と事業との如何なれば斯くも靈彩陸離たるや。彼は果し

て此世の人なるか、彼は果して此世の人たる以上に、猶ほ深く尊き或物には非るか。釋尊は眞に東方第一の人、彼は覺者也、師主也、如來也、而かも此人を以てしても猶ほ二十九年の修養と六年の苦行とを通して始めて正覺の域には入りし也。あはれ耶蘇は何人なれば、殆んど生れながら一切の繫縛を超え、清く、高く、深く、雄々しく、直ちに天上の靈火を捉へ來つて地上に投ずるの概ありしや。古今東西英雄聖者多しと雖、釋尊すら猶ほ斯の如きを得ず、況んや其他に於てをや。彼は單に西方第一の人たるに止らず、實に東西古今獨歩の人也。見よ是れ

此人こそは、ヒューマニチーに現はれたる最高のデヅ非ニチーに非るか。稱して天來の神人といふ、誰かは敢へて之を拒まん。

嗚呼感謝す可き哉讚美す可き哉、吾等の神よ。爾は吾等の中より釋尊を興して、夙に向上の模表を垂れ、又吾等の中に耶蘇を賜ひて、こゝに無限の慈愛を示しぬ。あはれ釋尊こそは人よりして如に至りし者然り爾に至りし者、耶蘇こそは神よりして人に至りし者、然り人となれる爾也。釋尊を呼んで人てふ者の最高代表者と名く可くんば、耶蘇は神の唯一なる化身即ち爾の獨子也。福なる

哉愚痴病弱予の如き者に在りてすら日本の國土に生れしが故に、明治の聖代に生れしが故に、釋尊を知り又耶蘇を知り、こゝに無限の恩寵を感じ、こゝに久遠の生命を享く。而かも予が此を知り彼を知る前に、爾は不可思議の攝理によりて、遼遠の古しへより、此一眞實を開顯し給へる也。神より外に善き者は無し、神より上に尊きは無し、されば神にして人たる耶蘇にも優して、尊く善き者は此世にあらず。即ち知る人類の最大幸福は神と耶蘇基督とを知る是れなりと。久遠の福音こゝに在り。

予は此福音を信するによりて、やゝに精神の自由を覺

え、恩寵の限りなきを感じつゝあり。如上の叙述は、予が信仰歴史の一端にして、予が小著「久遠の基督教」序説を抄録したる者。予が一年前に説ける全人の理想は、この神人の信仰によりて、新に不壞の骨髓を得、再び復活の春に遭はんとす。あはれ此身此儘にして靈肉一如の全人たらんとしたる予は、攝理のみ手に導かれ、靈肉共に一たび死の關門を潜つて、始めて更生しつゝある者なり。げにも耶蘇は宣へり、人若し新に生れずば、天國に入ること能はずと。人生の最高祝福は、恐らく此一語の色讀に在るのみ。(一九二二、一二)

死の一線を越えたる生の宗教

生の宗教あり、死の宗教あり、生死超越の宗教あり、而して又生死一貫の宗教あり、吾等はその孰れに歸依すべき乎。

希臘人の根本信仰は、確かに生の宗教なりき。復活してルネッサンスの思潮となり、延いて十九世紀の文明となりぬ。近世科學と云ひ、自然主義と云ひ、生の哲學と云ふもの皆是れ希臘主義の精髓に出づ、吾等が精神の脈管は全く希臘人の心血を享けて之を愛養しつゝある也。

西洋文明と一語に言ひ盡せどもヘブライ人の精神とギリシヤ人の精神とは必ずしも融合し終れるにあらず。メレシヨースキーの描けるジュリアンを見よ。レオナルド・ダ・ヴンチを見よ、ペーター・エンド・アレキシスを見よ。或は又イブセンの描けるカイゼル・ウント・ガリレールを見よ。誰か歐洲人の内部生命に於けるヘブライ精神とギリシヤ思想との衝突融合、乃至化育の問題が、今に至つて特に著しく人類思想界のバーニング・クワッションたるを感ぜざらんや。斯くの如き問題は既に業に基督教神學の歴史上、遼遠の昔に於て全く解釋せられたりきとして、超然

高擧する人々は實に福なるかな。その人々は天文學の智識をカルデヤ人に學び得て充分満足し得るならん。吾等
は不幸にして時代の推移を解す、然り人心の要求の時代
と共に轉化するを解す。光は遼遠の昔より來る。而かも
如何にして之を見るべき乎。新らしき道は吾等の自ら進
んで當に開拓すべき所なり。少くとも予一個人はギリシ
ヤ人の血脈を傳へて、生の宗教に徹底すべく、多年の苦
心を経たる者也。生の味に徹せんとする要求は予に於て
第一義慾なりき。予は斯くて全人の理想に憧れぬ。生の
全的、肯定を求めぬ。而して此一義に合はざる古聖の宗教

を目して朽ちたる過去の殿堂となしぬ。談何すれぞ斯く
も容易なりけむ。予は今にして其妄語を恥づ。あはれ生
の宗教に徹せんと欲せば死の一線を越えざる可からず。
然り古聖の宗教に於て、火の洗禮を受くるに非ずんば、
生の宗教は全からず。希臘人の精神は、菩提樹下なる正
覺者と十字架上の救世主とによりて、始めて久遠の生に
入るべし。棄つる事なくして得むと欲する人々は禍なる
哉。死する事なくして生きむと欲する人々は禍なる哉。
其人々は長しへに得且つ生くる事能はざるべし。予をし
て最も透明に此一大秘義を感得せしめたる者は、誠に釋

尊其人なりき。釋尊は予を導いて、生の宗教より死の宗教へ、然り現實其者の肯定より、永遠の否定へ往かしめたりき。

予は先づ智慧の證悟により、而して後ち全心の要求により、現實の生其者が、如何に慕はしく美しくとも、到底最高の價值を置くに足らず、又窮竟の實在となすに足らず、現實の生其者を滅盡して始めて、その奥に光顯する實在其者こそ吾等が最高の價值を置くべき不滅の世界なり本體なり生命なりと信じぬ。此久遠の眞理に於て釋尊の予に啓示し給へる特殊の要點は、生の一味に徹せん

と欲せば、須らく現實の生其者を超越せよとの根本義是れ也。

二

釋尊の正覺を呼んで、死の宗教と言はんは、素より穩當にあらず。釋尊其人は、不滅界に觸れて甘露の門を開き給へる不死の人格者なれば也。されど予が特に名けて死の宗教と云ふは専ら釋尊の踏みし否定の一路を力説せんどの意圖に出づ。今の世の批評家は必ず言はん、是れ佛陀の宗教に於ては阿含的の方便教に過ぎず、如是の小

乗素より大人の用に適せず、又衆生を載するに足らずと。聰明なる人々よ、若し是の如き批評にして眞理に適へる者ならば、菩提樹下に於ける釋尊の成道は、方便以上何等永遠の價值なき無意義の悟得に過ぎざりし乎。總ての史的研究は四諦の轉法輪を以て、根本佛教の精髓となす。諸行無常諸法無我の二大法印も、畢竟滅の一義に歸す。滅の一義を透過して始めて無餘の涅槃あり。無餘の涅槃に入りて始めて、無上菩提の悟得あり、四無量心の開發あり。而して後、然り、而して後ち始めて大乘諸經に於ける常樂我淨となり、大慈大悲の一佛心となる。大乘の

常は無常を透過したる常なるを思へ。大乘の我は無我を透過したる我なるを思へ。大慈大悲の一佛心も畢竟滅を透過し來れる菩提の心に外ならず。小乗佛教の含蓄する久遠の價值に悟入せずんば、到底大乘佛教の眞實を洞觀し得ざる也。此故に否定の一路を力説するは、釋尊成道の眞面目を特に開顯する所以なりとす。

ギリシヤ人と印度アリアンとは、一味の會通性を有す。理智的なる是れ也。カピラ城中の悉多太子を、アゼンス郊外の哲學者に擬するは、失當の嘲を免れざらむも、出家以前の釋尊はアゼンスの青年哲學者と似通へる者ある

が如し。理智の一路を辿りつゝも生の享樂に於て、永しへに且つ全からむと願ひつゝありしなりき。生の享樂とは何ぞや。生きんと欲する意思の満足是れ也。生きむと欲する意志の發現は、先づ肉體の生存慾是れ也。生存慾の中尤も根本的にして且つ原始的なる者を營養慾及び生殖慾となす。シルレルの呼んで飢と戀となせる所の者これ也。古往今來現世の活ける問題と云へば、何れか飢と戀との問題に非るべき。新聞記事の最大多数は皆是れ飢と戀とに渴ける人類の煩悶録に非ずや。されど若し生の宗教にして此の飢と戀との要求を、無條件に無差別に肯

定する者ならば、世界は闇黒たらざるを得ず。飢と戀との要求は素より人性の自然なるも、その制限なき満足は畢竟道德の否定に外ならざれば也。如何に突飛なる生の宗教も、飢と戀との要求を全く在るがまゝには肯定し得ざるべし。是れ文明人をして自然人に歸らしむる者なれば也。即ち如何なる生の宗教も現實の生其者を全然肯定し得べきにあらず。若し肯定し得といはゞ、そは畢竟野獸主義若くは少くとも半獸主義に墮せざるを得ざるなり。今の世の人々は餘りに文明化したれば自然に歸れの叫びも、本來無意義にはあらず。寧ろ是れ文明人をして方便

主義の桎梏より一超飛躍せしむる所以なるべし。唯吾等は人の人たる自然性を愛す、又愛せざる可からず。されど如何なる意味に於ても野獸魂を再興すべき價值あるべしとは思はざる也。

三

本來營養慾と生殖慾とは、吾等が肉體の生命を保持し、且つ永續せんとする者。而して是れ實に生きむと欲する意志の根本なり。吾等は先づ此一大事實を認めざる可らず。之を認めて而して後ち生の宗教の何事なるかを思へ。

生の宗教は先づ第一に此根本慾を肯定せざる可らず。而かも生の宗教は果して此根本慾を以て、人の人たる第一義欲なりと認むべきか。食慾性慾を超越して之と性質を異にせる第一義欲あるを認めざるべき乎。問題は茲にあり。若し食慾性慾に於てのみ人の人たる第一義欲を認むと云はゞ、其人は最高の價值を肉體の要求に認むる者にして、生殖器崇拜乃至生殖神崇拜の信仰に入りて始めて満足するを得べし。ギリシヤ人の通俗宗教は最も高度に、且つ美しく如是の信仰の開展し得たるなりき。而も生殖神の信仰の如きも若し徹底的に觀すれば、肉と物とを越

越して而して肉と物とを産み出すべき靈的實在の生命を肯定せざるを得ざるべく、此窮竟信念に入らば最早最高價值を肉體の要求に置くの現實主義に止る能はざるなり。今暫く此窮竟信念に觸れず、専ら人心の性質に即して云はば、食慾性慾は確かに吾等の根本慾なるも、窮竟慾にはあらず。原始慾なるも最高慾にはあらず。又動物慾なるも人間慾にはあらず。推し詰めて之を思へば食慾性慾の背後に猶ほ基底なる欲求あり、「自由ならむとする意志」是れ也。總ての生物現象は、無意識的に自由ならんとする萬有の意志の顯現也。意識的に自由ならんとする者

は天上天下恐らくは只人類あるのみ。人類にありては食慾も性慾も餘他一切の慾も皆自由ならんとする意志の發表也。何物か自由ならんとする。「我」てふ實在の人格是れ也。「我」の自由ならんとする、是れ即ち生きんと欲する意志なる者の根底基本也。須らく眼を茲に開け、生の要求を徹底的に思量し來れば、「我」の自由ならんとする意志に外ならずして、彼の肉的満足の如きは、畢竟第二義の條件に過ぎず。第一義は全く內的意志の自由慾に在る也。生の宗教を求むる者よ。生の一昧に徹せんと欲せば、須らく內的自由を得よ。自由なる「我」を得よ。即ち靈覺の

眞心を得よ。生の醍醐味こゝにあり。而かも是れ肉の繋縛を脱して始めて到達し得べき境涯にあらずや。然り肉の要求と享樂との最高價値を否定して始めて徹底的に味讀し得べき眞實に非ずや。重ねて言ふ、生の一昧に徹せんと欲せば、須らく内的自由を得よ。内的自由を得んと欲せば、須らく否定の一路を進め。然らば彼岸の光に逢ひ、久遠の生に入るを得べし。

菩提樹下の釋尊は、如是の福音を此世に齎らし、身を以て之を保證しぬ。薄信子の如きもその遺されたる足跡を踏み、生の醍醐味に觸れ得たるの歡喜を禁じ得ざる者

なり。若き人よ、我が友よ。自ら欺く勿れ、自ら誇る勿れ。現實の生其儘を肯定して、徹底の満足ありと言ふが如きは、若き人よ、我が友よ。そは虚欺なり、高慢なり、又不幸にして偽善なり。爾の心に横はれる罪と欲との深き根を見ずや。然らば現實の生を斷じて、然り否定の關門を過ぎ、死の一線を越えて始めて、久遠の生命に至るを知らん。眼を開け、自らを知る者は福也。

四

予は釋尊の宗教によりて、否定の一路を學びたり。而

かも一路の窮る處、是れ豈に永遠の肯定に非ずや。釋尊の悟得を「滅」の一義に見て、死の宗教と名くるは蓋し佛道の門戸にして、その堂奥は全く「不滅」の涅槃實證に在るべし。釋尊其人は素より「滅」の門戸を開いて「不滅」の堂奥を顯せる者なり。されば釋尊の宗教は死の宗教と呼ばるゝよりも、寧ろ生死を超越したる宗教なりと稱へらるべし。大乘諸經に至りては、明かに此根本義を開顯したる者の如し。然れども其超越は猶ほ未だ厭離の臭ひあり。こゝに至りて耶蘇の宗教を顧みるに、予はその玲瓏玉の如く且つ天真爛漫たる生死一貫の光彩を歎美せざらんと欲す

るも能はざる者也。

あはれナザレの耶蘇は、そも如何なる人なれば、此世の生死を超越したる靈的生命を體現して、今に至るまで存らへ給ふか。然り、耶蘇の人格は、久遠眞實の基督として、今も吾等が前に生く。彼が此世に齎せる神の國の福音は、靈的生命の絶對價値を根本精神とし、又その肉體的顯現を窮竟理想とす。彼は時として希臘人の如く現實の生其者を悦樂するが如くなりき。彼は又時として釋尊の如く、一切の欲望を否定し終れるが如くなりき。果してその孰れをか彼の眞相なりとすべき。げに彼は孰れに

もあらず。彼は生死を超越したる久遠の道を歩めるなりき。さらば彼は苦樂を絶し有無を絶したる所謂中道の行者なりしか。思ふに釋尊の中道は單なる觀照にはあらずれど、猶ほ此世を遠離したる彼岸の一路なるが如かりき。而かも耶蘇の歩める道は、彼岸を此世に齎したる、然り生死を超越すと謂ふよりは、寧ろ生死を一貫し、苦樂を脫離すと謂ふよりは、寧ろ苦樂を支配しつゝ、久遠の生命を發展し行く創造の一路にてありき。釋尊が涅槃の中に於て鮮かに觸れ得たる不滅の生命を、耶蘇は身證體現して長へに世界の光となしぬ。生の宗教は、耶蘇の精神

に觸れて、始めて不滅の眼目を得べく、死の宗教は、耶蘇の人格を俟ちて、始めてその眞髓を發揮し來るべし。予は信ず希臘主義を活かしむる者は耶蘇の福音なりと。予は信ず、佛陀の宗教を活かしむる者は亦耶蘇の福音なりと。予は信ず、耶蘇の福音こそは、最勝菩提、無上正覺、然り、一切宗教の眞髓にして且つ奧義なることを。山上の説教に曰く、我れ律法と豫言者とを廢つるが爲めに來れりと思ふ勿れ、我れ來りて之を廢つるに非ず、成就せんが爲めなりと。茲に所謂律法と豫言者とはモーゼとエレミヤとイザヤの夫れのみを指すにはあらず。耶蘇

は世界人文の最高山巔に立ちて、今しも此偉大なる宣言を發し給ふもの也。然りホメールの詩とプラトーンの哲學とを成就する者も亦耶蘇也。吠陀の思想と釋尊の福音とを成就する者も亦耶蘇也。實に誠に予は今世界の民に告げむ。一天四海皆妙法に歸す、その妙法は即ち耶蘇の福音是れ也。(一九二二、三)

目を閉ぢよ

光を慕ふ若き者よ。須らく爾の目を閉ぢよ。さらば光に逢ふ事を得ん。

予は今、古しへの聖者賢哲が身を以て啓示したる此一秘義を開顯せむが爲めに、暫く饒舌を試みんとす。予は一個の青年として、久しう向上の一路に迷へる者なり。久遠の光に憧れながら、視れども見えざるの悲しみを懷きて、茲に幾歳の春を経たり。予が肉眼は開きたれど、予が心眼は盲ひたるなりき。否、予は開きたる肉眼を以

て光を見んと欲せしが故に、又見るを得べしと信せしが故に、却つて光に逢はざるなりき。げにも予が肉眼は開きたり。開ける此肉眼は果して何物をか見たる。あはれ此肉眼こそは、現代文明の美觀に迷うて、之が爲めに囚はれたる者なりき。

現代の文明よ。是れ豈に原始の樂園を逐はれしアダムとイブとが建設したる第二の樂園には非るか。第二の樂園は、智慧の美しき果實を結ぶ生命の樹の上に建てられたり。されど此生命の樹は、神を離れて既に久しく、天來の光に觸れずして、只肉體の情慾に育ちぬ。「文明とは

何ぞや、總ての官能の開発是れとは、樂園に住む多くの市民の讚美措かざる解説とす。官能の要求を罪惡と見たるは、古今の聖者が沈痛なる實驗の叫びにてはあれど、一超々過し來れば青山皆既に春。官能素とより是認すべし。されど其要求を悉く是認して、而かも徹底の満足あるか。抑も官能の開発とは何ぞ。五官の感受し得べき總ての悦樂、五官の作爲し得べき總ての價值、こゝに官能の開発あり。快き感じを強く且つ久しく、視、聽き、味ひ、觸れ、現さむとする即ち是れ官能の要求にして、その窮極を求むれば、心靈の奥に分け入りて始めて徹底す

るを得べしと雖、官能を重んずる人々に取りて、そは本來の意義にあらず。官能其者の感じを重んじ、只専ら之に即してのみ生を享樂せむとする、是れ實に官能主義の本領なり。アダムより此かた、第二樂園の住民は、皆此本領に生きんとしたり。げにも現代の文明は、斯の如き生の享樂に於て、最高價值を認むるなりき。

原始の樂園を逐はれたるアダムとイブとは、果して墮落の第一人なりしか。史家は曰ふ、そは全く墮落に非ず、寧ろ最初の進歩なりき。墮落か進歩か予は今暫く之を問はじ。予は只第二樂園を望んで、その豊富なる悦樂と、

廣濶なる規模とを喜びたりき。そこに藝術の花は開けり、そこに學問の實は結べり。偉大なる建築、繁華なる市場、歌舞音樂の如何に賑かなるよ、製造工業の如何に盛んなるよ、蒸汽、石炭、瓦斯、電氣の自由自在なる應用によりて、文明人の感受する便宜と安樂との如何に大いなるよ。讚美すべきは文明の恩惠なる哉。若し此世に拜む可き神ありとせば、そは恐く文明の精靈なるべし。嗚呼予は斯の如く思惟したる事もありき。今の世の多くの人は、猶ほ斯の如く思惟しつゝあるならむ。現代文明を謳歌して之を超越するの必要を感じざる人々は、畢竟その最深

意識に於ては、官能崇拜以上に出でじ。少くとも官能の満足に於て専ら人生の意義と價值とを認むる者ならずんば非ず。今の世の人々が追求措かざる總ての智識と事業と財産と權勢と名譽と、詮じ來れば此一義に歸入せざる者とては非る也。第二樂園の羨望者たりし予も、斯くして不知不識、危ふくも一種の官能主義者たらんとせしが、滔々たる今の世の文明謳歌者乃至耽溺者は即ち夫れなりと斷言せむも恐らく誣むたる妄語に非じ。

予は肉眼を開いて、此の如き文明の花園を眺め、恍惚として酔へるが如くなりき。予は此花園の住民たらんが

爲めには、營々辛苦も亦厭はずと志し、進んでその開拓者たり培養者たるは人間の大きいなる職分と思惟しぬ。而かも是れ畢竟官能崇拜に過ぎずとの隠れたる一大眞實に至つては、容易に悟得する能はざりき。幸にして靈覺の時は來りぬ。予は豁然として文明なる者の實相を透觀すべくなりぬ。あはれ文明何物ぞ、官能何物ぞ。人生は如何に脆く果敢なしとも、素と是れ嚴肅なる實在に非ずや。五感の享樂し作爲する以上に何物か神聖偉大なる靈能無しとせば、何處にか復た人生の存在價值を見出し得べき。肉體は貴き宮居なり、されど肉體は人にあらず、人は肉

體にあらず。肉體を超越して不壞の眞人あり。ナザレの耶蘇が「全世界にも代へ難き生命」と宣ひしは即ち是れ也。

予は今既に新しき世界の民なり。第三の樂園を開拓せんとする若き勞働者の一人なり。今の世の文明は予が眼頭に在りてやゝに復活し來らんとす。されど予は、最早在るが儘なる文明を羨望し歎美する能はざる者なり。予は斷乎として肉眼を鎖しぬ。然り、文明の花園に對する羨望の目を全く閉ぢぬ。目を文明に閉ぢ、思を官能に絶ちたる心機の一轉瞬に於て、端なくも既に久しく視て見る能はず求めて逢ふを得ざりし光に觸れたる也。

光を慕ふ若き者よ。須く先づ目を文明に閉ぢよ。美しき文明の彩光の爾が眼頭に消ゆる時、そこに永遠不滅なる清光忽然として現はれむ。

二

二人の王者、吾等を支配す。四圍と意志と是れ也。人は二人の主に住ふる事能はず。目を文明に閉ぢよといふは、即ち四圍の誘惑のうち最も美しく大いなる者を一擲し了るの謂ひ也。吾等に諸の煩悶あり、憂慮あり、不平あり、怨恨あり。吾等は動もすれば之が爲めに繫縛

せられて自由を樂しむ能はざる者なり。而かも總ての貪嗔痴は、畢竟四圍の誘惑によりて一心を拉し去らるゝが故のみ。目を閉ぢよ。斷じて目を四圍の誘惑に閉ぢよ。目を一切の文明に閉ぢよ。然り心の中に於ける慾望の眼を閉づる前に、先づ文字通りに肉の目を閉ぢよ。視る勿れ、視んと思ふ勿れ。只須らく目を閉ぢよ。只須らく目を閉ぢよ。此一句を體讀して能く久しきに堪ふる者は必ず救ひの光に逢はん。今暫く一切の議論を放棄し、只端的に其次第を説かん乎。先づ爾の目を閉ぢよ。目を閉ぢて正座し、力を丹田に籠むるの一念以外、

亦何事をも心頭に留むる勿れ。否、其一念すらも超越して、力自ら丹田に満ち、心境廓落、雲の大空に浮ぶが如きに至るを期せよ。否、否、一切の期待を脱して須らく大空に浮ぶの雲となれ。人間雲となる、寧ろ禍なりと云ふが如き、彼のソフ井ストの詭辯に耳を藉す事勿れ。雲となり霞となり光となり神となる。こゝに偉大なる人間あり。須らく一切を放擲して正座目を閉ぢよ。而して先づ大空に浮ぶの雲となれ。

肉眼を開く時、心は外物の誘ふ所となりて、思ひ煩ひ之より生ず。今若し正座目を閉づれば、萬象一抹の間に

歸りて、心の動搖止むかと思はる。而かも試みに目を閉ぢよ。始めて正座目を閉づれば、必ず黙々之を久しうする間に、何等か觀念の心中に起るありて、聯想は更に聯想を呼び、彼より是へ、是より彼へ、はては雜念妄想亂麻の如く、正座瞑目して却つて心の動搖窮る處を知らざるに驚かむ。蓋し是れ猶ほ門外の境地に在る也。如何にして此境地を超越せむ乎。曰く、須く渾身の力を丹田に籠めよ、渾身の力を丹田に籠むること五分十分乃至二三十分に及べば、手足頓に暖氣を感じ、宛ら心頭に春の動くを覚え、身は是れ大空に浮ぶ雲の、優游去來するが如

くならむ。若し斷じて之を行へば、修練二三箇月に及ばずして、恐くは何人も此妙境に臻るを得べし。是れ實に正座修行の門戸に於ける最初の感興にして、彼の亂麻に似たる雜念の如きは、丹田に力の満つると同時に、求めずして消滅し了るを常とす。此故に目を閉ぢて一たび正座せば、復た雜念を掃ひ去らんと思ひ煩ふ事勿れ。只力を丹田に籠めよ。然り渾身の力を籠めよ。雜念霞の如く消えて、心界轉た浩々たるべし。此間の消息、只各個人の實驗に俟つも。先哲人を欺かず、予の如きも信じてその遺蹤を踏み、身は大空に浮ぶ雲となり、心は澄みわた

る太虚の光となるの離言絶慮なる消息に觸れし正座修行の一人也。

理性を重んじ、科學を信じて、只こゝにのみ向上一路ありと爲すものは、恐らく如是の心理的經驗を以て無意味の囈語となさむ。されど目を閉ぢて正座し得る者は福なる哉。その人は修練の久しきに從ひ、諸慾の爲めに煩はされず、隨處に主となりて諸慾を駕御し、清淨なる精神の故に自由を享樂し得可ければ也。あはれ目を閉ぢて正座する者よ。前賢先哲の遺蹤を趁うて一切放擲の冥想の中に太虚の光を求むる者よ。文明人の尺度に照せば、

爾は實に愚かなる可し。然らば永しへに愚かなれ。神は愚かなる者の心頭に不滅の燈明を點じ給はん。寂靜の中に光あり。光は寂靜の中より來る。寂靜の味に徹せずんば、何れの時か人生の歸趣を悟らん。

正座目を閉ぢよ、而して先づ寂靜の光を味へ。

三

光を慕ふ若き者よ。爾は寂靜の光に逢ひて、光を慕ふ情熱の新に燃ゆるを覚えしならむ。暫く爾の座より起て、起つて而して靜かに祈れ。

光を慕ふ者は祈る事の如何ばかり福なるかを知る。祈りは靈魂のポエトリー也。祈りは時として讚美歌なるべく、又時として師子吼なるべし。祈りは聖者の呷きなるべく、また英雄の叫びなるべし。愛と望と信とに生くる者は、祈らざらんとして祈らざるを得ず。職分の觀念あり、使命の自覺あり、感恩の至情ある者は、祈らざらんとして祈らざるを得ず。祈りは誠意誠心也。歸依信賴也。神智靈覺也。祈りは畢竟我が衷なる神の聲也。崇高偉大なる心靈の面目は、祈りの中より現はれ來る。祈りの中に大いなる人あり。祈りの中に神は在ます。然り祈りの

奥義に至つては、恐らく祈りなきの祈り、神智靈覺只夫れのみ。

祈りの奥義は深く且つ高し。言説を以ては其靈興を傳ふ可からず、人皆各々之を實驗して、祈りの中に神在ますの一大眞實を味ふべき也。されど今求道の人々の爲め、暫く山路の棊を示さん乎。祈りは意志の鍛練也。意志をして常に光明を慕はしめ、不善を棄て、善に勇ましむるは、祈りの結ぶ果實にして、信徒の多くが、實證する所也。又祈りは精神の集中也。人何事をか爲さむとする、成否の半ばは繋りて精神の集中力に在るべし。祈りは人

をして大事を爲さしむる不思議の力ある者なり。況んや義人聖徒の祈りに於てをや。又祈りは赤心の告白也。人は骨肉の親に對しても言ひ難き悩みを有するを常とす。されど天地の父は、隠れたるに覽給ふ神也。神はわが赤心を照らし給ふ、我れ奚んぞ隠さんや。在るが儘なる赤心を披いて、内省し懺悔し且つ告白す。斯くして罪と憂の重き荷は宛ら笠の淡雪の如く、日光の下に消え果てなむ。又祈りは感恩の至誠也。神は罪を赦し恵を與ふ。然り吾等が靈魂を救うて、自由の生活に入らしめ給ふ。人猶ほ未だ此心證を得ずとも、少くとも至誠の祈りに依り

て患難にも慰めを感じ、罪の苛責の中にも光明の一路を示さる。身自ら之を實驗する者、誰か感謝の涙なからん。涙の祈りは苦痛の中にあらず、寧ろ感恩の中に在る者なり。又祈りは理想の活現也。總ての理想は祈りの中に大いなる者となり深き者となり清く高く強き者となる。冷たき觀念として描かれし理想も、一たび祈りの熔爐に入れば、炎々天を焦がすの熱情を喚發し來らんとす。祈りなきの理想は、哲學者の夢に過ぎず、理想は祈りとなつて始めて事實の上に活現し來る。斯くて祈りは創造の力ある者なり。然り祈りは又靈魂の飛躍也。靈魂神を離る

る時、インスピレーションは永しへに來らず。靈魂神に觸るゝ時、そこに革命あり生長あり。祈るごとに靈魂は飛躍しつゝ向上の一路を辿る者なり。あはれ靈魂飛躍の消息こそ世にも尊く嬉しけれ。靈魂自ら飛躍すと謂はんは未だ盡せる者にあらず。神、靈魂を攝取して、直ちに光明の懷に吾等を抱き給ふに非ずや。茲に至りて即ち知るべし、祈りは恩寵の光顯也。吾等は一切の小智我見を棄て、天地の主にして父なる神に、全身全靈を歸依する時、最早我祈るにあらず、神我が衷に在りて祈り給ふの幽妙不可測なる消息に直入すべし。即ち是れ祈りなきの

祈りに非ずや、神智靈覺の境涯に非ずや。祈りてこゝに至る者は福なり。其人は靈覺の心の中に、神的生命を喚發し來れば也。祈りの力は驚く可きかな。寂靜の光の奥より、生命の神を顯はれしむるは、祈りよ、爾の力也。あはれ、光を慕ふ人々よ。端的に神を見んと欲せば、須らく正座目を閉ぢよ、而して後ち靜かに祈れ。

神は寂靜の中に在り、神は靈覺の中に在り。神の國は爾曹の衷に在りと耶蘇の宣ひしは即ち夫れ也。(二九二、三)

眼を開け

若き友よ眼を開け。

肉の目を閉ぢて冥想久しければ、自ら超越の一境に至らん。そこに或物の光耀を感得したる人は、やがて心の眼の開かるゝを證悟する時あるべし。未だ神を知らざる者も、誠心誠意、冥想に加ふるに祈禱を以てする登高の一路を踏まば、必らず開眼の喜びに逢ふべし。眼を開くとは何事ぞや。

一切の物慾を超越して、唯一窮竟の實在に逢著し、こ

こに新しき肯定の世界を發見する是れ也。

一切空の奥よりして、新しき世界は躍動し來る。予は此一機の開悟を以て、實に復活の秘義とは爲す。今試みに少しく媿々の絮説を加へん乎。

再び説く開眼とは何ぞや、曰く物慾を超越したる精神世界が、眞に窮竟の實在にして宇宙萬有一切の根據、全く此中に在るを證悟する是れ也。

證悟とは實證解悟を意味す。身を以て之を實證し、智を以て之を解悟するの謂ひ也。今の世の人々は、智解を以て一切の秘密を悟了し得べしと爲す。而かも知的解釋

は決して人生問題の終局にあらず、人生問題の終局は寧ろ此に在らずして彼に在り。即ち全人格的實證に在り。全人格的實證は、意志決定を中軸とす。如何にして如何なる意志をか決定すべき。問題は茲に在り。予は古今東西の聖者が身を以て啓示したる不朽の光明に照し、冥想と祈禱とを以て、意志決定の二大導者と爲す。倦まず撓まず此道を蹈む者は、必ず人間生活の根本意志を決定して、開眼の喜びを實證し得べし。智解は實證を俟ちて始めて自己の有と爲る。

既に肉の目を閉ぢたらんには、やがて金剛不動の意志

決定が、却つて否定の後に來るの一見論理を絶したる消息に逢著するならむ。然り、意志斷滅の後に始めて意志決定あり。生きむとする根本意志を斷滅し得て而して始めて久遠の生には入るべき也。本來生の意志とは何ぞや。營養の欲、生殖の欲、此二つが漸く分化し來りて、一切の欲求と爲る。今の世の人々は殆んど皆總て名譽に生き、財産に生き、權勢に生き、安逸に生き、肉慾に生きむとするに非ずや。悲慘と寂寞と滑稽とに満てる人間世界の演劇は、不幸にして皆此の生の意志より迸り出でつゝあるに非ずや。名譽財産乃至肉慾、即ちナザレの耶蘇の呼

んで此世に属ける財といへる者にこそ、今の世の人々は、奴隸の如く仕へつゝあるに非ずや。而かも耶蘇は宣く、神と財とは兼ね仕ふる能はずと。即ち財を棄て、神に仕ふるを人生の第一義なりとせば、名譽財産乃至肉慾の満足を唯一の目的とする生の意志をば斷滅し盡して、見えざる或物を欣求するは、眞の人生を愛する者の踏むべき當然の道なるべし。

此一路を行け。而して物慾を超越したる一切空の心境を味へ。靈覺忽ち廓然として、こゝぞ窮竟實在なるの證悟に徹底するを得べし。哲學的思辨にあらず、又單なる

心理的知覺にあらず。實に冥想と祈禱との久しき修養より來る全心的肯定なり。爰に至りて即ち悟る、一切の生慾も、本來を言へば畢竟空。久遠眞實の實在は、只物慾を超越したる彼岸の一境に在るのみ。物慾に囚はるゝ現實の我也、此一境を味はんか、そこに窮竟實在を觀ずると共に、又最高價值を感ず。

あはれ窮竟實在よ、是れ予の呼んで神とは言ふ者なり。神と呼ばざるを得ざる者なり。此神を發見するは即ち最高價值を發見する也。耶蘇の所謂財に對して最高價值を置きし者も、忽ちにして價值顛倒の一大實驗を握るべし。

而も萬物は神に在りて生く。窮竟の實在に照し、又最高の價值より見れば、一切の生慾本來空にてはあれど、既に窮竟の實在を體し、最高の價值を知り得たる悟達の人々に取りては、一切の生慾も、始めて本來の意義を發揮し來る。爰に至りて後ち始めて、根本的に徹底的に生の意志を肯定し得る也。即ち久遠眞實なる意志決定に到達し得る也。即ち人生問題なる者の全人格的解釋を色讀し得る也。諸慾滅盡、意志斷滅の大いなる否定の奥より、鮮かに諸慾充實、意志決定の新しき肯定を發見すとは蓋し全く此謂ひ也。

物質を超越したる精神の世界あり。宗教的に言へば物慾を超越したる心靈の王國あり。此窮竟實在に徹して、生命の根據こゝに在りと鮮かに且つ堅く證悟し信解する、之を開眼の根本義とは爲す。

若き友よ眼を開け。窮竟の實在に、最高の價值に、生命の根據に、然り神に向つて眼を開け。

二

窮竟の實在に徹して、生命の根據に觸るゝ、その玄微なる證悟こそは、實に一切肯定の確信を生ずる源泉なり。

窮竟實在に根ざせる生の意志は、現象世界に根ざせる生の意志と、一脈相通するが如くして、實は一線相隔つ。前者は神に仕ふる生活、後者は財に仕ふる生活。前者は靈的生命にして、後者は肉的生命。肉的生命を超越して始めて靈的生命あり、一線相隔つる者あるが故に、一超飛躍の要あり。宗教上の詞にて、最早我れ生くるに非すと云ひ、肉に死して靈に生くと云ひ、若くは死の一關を突破すと云ひ、若くは大死の底に活人ありと云ふもの、畢竟此間の消息のみ。

窮竟實在に根ざせる意志活動、即ち靈的生命とは何ぞ。

猶ほ審かに之を語らむ。

先づ消極の一面より説かむ乎。靈的生命とは、名譽財産乃至肉情と云ふが如き、利慾に對する愛の生活より全く超越し得たる精神の生活是れ也。此の消極的關門を透過せずしては、到底靈的生命の真髓を體達する能はざる者なり。予は重ねて切言す。此の一關を透過し盡さずとも、靈的生命の何たるやを知解するに於て、必らずしも不可能にはあらず。而かも此の一關を透過し盡さずでは到底徹底的に之を體達し得べくもあらず。且つ此の一關を透過し盡さんか、靈的生命の何たるやは最早之を問ふの

要なきを覚えん、既に言語にも傳へ難き其生命の悦樂を自得すれば也。

されど猶積極の一面より説かむ乎。靈的生命とは畢竟真善美を愛する精神の生活是れ也。而かも真善美は無限にして且つ無窮なり。又差別あるに似て實は同體なり。即ち真なる者は必ず善美なる如く、善なる者は必ず真にして美ならざるを得ず。真善美は三にして一、一にして三。要するに是窮竟の實在たり最高の價值たり永遠の生命たる神其者の性格を言ひ現はしたるのみ。真善美を愛すと言ふは哲學的の説明也。神を愛すと言ふは單刀直入

宗教的に其本體を捉へたる者也。然り靈的生命とは、即ち真善美の神に對する人心の追求愛慕是れ也。讚歎驚異是れ也、歸依渴仰是れ也、默契同化是れ也。

靈的生命の充實發展を以て、人生の第一義と爲す。そこに宗教の神髓あり、眞實の生活あり。

眞理を愛するよりも名譽を愛する者は、眞實の學者にあらざる也。否、眞實の學者は名譽を超越して只眞理の愛に生きむと欲する也。美を愛するよりも利益を愛する者は、眞實の美術家にあらざる也。否、眞實の美術家は利慾を超越して、只美の愛に生きむとする者也。政治家

は名譽を重んじ、事功を重んず。而かも眞實なる政治家は、毀譽褒貶を度外視し、眼前一時の事功を冷眼視し、只國家人民の爲めに最善の理想を實現せむとはする也。政治家の權勢欲は、只此超越的精神によりて淨化せらる。權勢の爲めの權勢欲は、小人の凶夢たるに過ぎず。實業家は利益を求む。額に汗し心を勞して錙銖の争に熱するは、全く利慾の結果ならん。而かも利慾を超越して、眞實の人生あり、金錢資産は、只眞善美の享樂と創造との故に、始めて意義を發揮し來るてふ超越的精神に觸れざる者は、假令金殿玉樓に住むとも、猶ほ空華幻影の生活を營むに過ぎざるなり。

總て名譽財産乃至肉情の欲求を中心として生活する者は、一時の快樂を擅にするとも、徹底の満足を知らず、最高の價値を知らず、不滅の生命を知らざるが故に、未だ眞實の人生を營めりとは謂ふ可からず。眞實の人生は靈的生命の實現に在り。眼を此一義に開かずんば、誰か能く心を生死に煩はされずと言ひ得んや、誰か能く禍福浮沈の間に安心立命すと言ひ得んや、誰か能く人格の威嚴を知ると言ひ得んや、誰か自ら重んずると共に他を重んじ、己れを愛する如く他を愛すと言ひ得んや、誰か能

く人生に普遍なる意義と價值とを證悟すと言ひ得んや。人生の根據は超越の世界に在り、人はこゝより生れ、こゝに活き、こゝへ歸る。若き友よ、此の大いなる秘密の門は、何人か之を開きたりし。予はその半ばを釋尊に學び、全きをナザレの耶穌に學びぬ。予は此二大人格を愛慕し、讚歎し、崇拜す。

三

眞實の人生は、靈的生命の實現に在りとは、予の既に言へる所なり。實現とは何ぞや。

實現とは創造の謂ひ也。靈的生命は夫れ自身に於て創造の力あり。

眞理を探究するは是れ一の創造なり。單に新しき眞理を發見する事のみが必らずしも創造なりとはせず、古き眞理を理解して、之に透徹し之を體達するに至れば、即ち自己の人格に於て一の新しき創造を成就し得たる者なり。之を進歩と名く。創造なき處に進歩なる者なし。美に感じ美を味ふも亦此意味に於て一の創造なり。されど思想の上に於て新しき眞理を開顯すると同じく、藝術の上に於て新らしき美を發揮するは、一層高く深き意義に

於ける創造なり。如是の創造は超個人的世界史的價值ある者にして、多く天才の此世に帶ぶる所の使命と謂ふべし。善の何たるやを理解するも亦道德意識の上に於ける一の創造を成就し得たる者なり。而かも善を事實に行ふは、新しき真理の發見、新しき美の創作と等しく、大いなる意義を人生全體に有せずんばあらず。而して真理と美との創造は、單に特殊の才能を有する少數者の能くする處なるも、善の創造は始んど總ての人を通して能くし得ずといふ事なし。且つ人生の自由と幸福が主として善意志の結果に俟つとせば、人生の中心事業は善の創造に

在りと見るべし。而かも何事か是れ最高善なる。心を盡して神を愛せよとの教訓以上に、如何なる古今の明哲も加ふる所を知らざる也。

一切の生の意志は、窮竟實在より出で、始めて久遠眞實なる善の意志とは爲る。聖書に所謂永生とは是れ也。須らく窮竟の實在を求めよ、然り全心全力を盡して眞善美の神を愛せよ。神を愛する生活に於て、心靈は始めて徹底の満足を感じ、人類は始めて普遍の幸福を享く。神を愛する、是れ一事にして萬事也。

若き友よ、眼を開け。眼を超越の世界に開き、神を愛

して生活せよ。是れ自覺の根本なり。此根本を捉ふれば個性の發揮、人格の完成、亦多く言ふを須ゐざる也。問題は自ら解釋せらる。(二九二、四) 問

本
來
の
我

吾儕は瓦器の中に眞珠の光を藏する者なり。眞珠の光とは何ぞや、本來の我是れ也。此光を我が衷に發見したる者は、始めて人生の崇嚴を知り、禮拜の意義を感ず。

歴史以前埃及文化の源泉たりしメロエの都市は、その名を古傳説に留むれども、果して空想の所産ならざりしや否や、人皆久しく之を疑ひぬ。奚んぞ知らん四千年後の今日、猶ほ依然として舊態を失はず、ナイル河畔の沙漠の中より、再び天日の下に現はれんとは。特に吾儕は

發掘の過程を聽いて、靈感の禁じ難き者ある也。考古學者の最初に見出したるは、アモンの神に獻げられたる小羊の石像にてありき。聰明なる彼の學者は、一片の石像を手にしつゝ、千古の秘密を讀めるなりき。發掘の事業は始りぬ、而して沙漠の只中より先づ顯はれしは神殿にてありき。あはれ吾儕が心の世界も大いなる沙漠に似たり。堀りても行かば何物か光その中より來りぬべし。然り、恐らくは吾儕が心の中にも確かにメロエの都あるべし。否、その都に祭られたるアモンの神よりも更に大いなる神の尊き宮居あるべし。心の沙漠を堀りもて行け。

二

清き心に徹底すれば、そこに本來の我顯はる。白玉玲瓏たり、靈彩陸離たり。本來の我よと悟りて、此一境に沈潜久しければ法悦の情緒は湧いて泉の如くならむ。されどそは味ふ可くして酔ふ可きにあらず。法悦の奥には感謝ある也。吾儕の實驗は之を自證す。清き心に徹底して既に一切を空了せば、本來の我顯はにして、能く一切を明了し、靈覺の眼に萬象を映じて、新しき光耀を感ぜしむ。此光耀の一刹那、思はず識らず聲を放ちて、ア、

神よと驚き叫ぶ、こゝに大いなる啓示あり。

思ふに現實の我と本來の我とは同じ心の中に在れど、現實の我は意識の中軸に存し、本來の我は超意識の彼岸に存す。而して此超意識の世界こそは、實に無限不可測の深みある心靈の王國にてある也。吾儕にして本來の我を感得せんか、その刹那、現實の我は再び復活し來りて、驚きの聲を放つに非ずや。沙漠の中より神廟現はる、恍然たるも倏忽のみ、誰かは仰いで驚き喜ばざらむ。驚くは現實の我、驚かるゝは本來の我。然り本來の我として靈覺の心に満ち溢れ耀き出づる實在の神也。

吾儕は本來の我を知りて、始めて父なる神に逢ひぬ。

三

如何にしてか本來の我を知るべき。冥想と祈禱とは是れ也。

試みに静座冥想せよ。冥想境に入つて未だ自己意識を脱せざる間は、猶ほ我と神との隔てあり。隔てありと言はんは當らざるも、神と一體たるの超越感に直入し得ざるの憾みあり。冥想の極致に至れば、一切の意識を絶し只靈然として自照するあるのみ。無記の一境是れ也。そ

こに本來の我あるを見ずや。

祈禱も亦本來の我を見るべき登高の一路也。未だ神の實在に觸れず、而かも神の名を呼んで祈禱する如き、或は無意味の兒戯に類すと感ずるもあらん。されど求むれば與へられ、敲けば開かるゝ消息を思へ。未だ明かに神を知らずとも、之を求むるの心ある者は、須らく或物の存在を信じて、知らざる神を仰ぎ望み、渾身の力を揮つて祈禱す可し、祈禱は知らざる神を知らしめ、見えざる神を見せしむれば也。

祈禱は人の靈魂を潔めて自ら神に近かしむ。只言語を

もて祈る間は、我と神と猶ほ隔てあり。而かも求むる心の中に、光は自ら現はれ來り、一縷の靈氣脈々として相通ず。祈りの最高潮に達すれば、一切の意識を離れて、我自ら言ふ處を知らず、冥合あるのみ默契あるのみ。靈覺あるのみ。莊嚴なる一境よ、そは實在の無限の深みに人の靈魂を徹せしむ。そこに本來の我あるを見ずや。本來の我は即ち靈覺の心にして、久遠眞實なる實在其者也。

本來の我を知るは神子の自覺也。靈覺の心を知るは天父の認識也。是等は殆んど全く一機の靈感にして、證悟

に二つはあらざる也。而かも我が衷に本來の我を認めて、獨り超然高擧しつゝ、終に父なる神に對する子たるの心を發せずとせば、少くとも吾儕の自證に照して、そは徹底の悟得にあらず。再び現實の我を見よ。本來の我に往き、而して現實の我に還る。そこに眞の生活あり。所謂魂を天に宿しつゝ、脚を地に立てつゝ、往きて而して復た還る。宗教の眞髓は實に一貫の此道に在り。

冥想と祈禱と道の栞りは異れど、無記と默契と言ひ現はしは同じからねど、根本實在は畢竟一境のみ。而かも電光影裏、春風自ら起る。本來の我と悟れば、同時に靈

覺の神は在り。神の子と自覺すれば、同時に父なる神は在り。只實在の光耀に觸れて離言絶慮の一境に没入し終るとせば、そは素より吾儕の事にあらず。吾儕は既に自己以上の或物あるを確信す。故に端的明白にその或物を洞見しては、驚異なき能はず歎美なきを得ず。吾儕は超意識の恍惚境に在りても、猶ほ一個の人間也。無記默契の一境に天來の光耀を感じる刹那、我をも識らずア、神よと驚き叫ぶは寧ろ自然なるべし。是れ本來の我に對する現實の我の讚歎也。是れ現實の我に對する本來の我の歎聲也。げにも無記默契の一境と、讚歎驚喜の一聲とは、

宛ら沈黙の幽谷に入りて、神往き氣微かなる一刹那、ア、と呼びオ、と應ふるにも似たらずや。其間精神の靈感あるのみ、論理の道を辿るには非るなり。少くとも吾儕は斯の如く實證したるが故に、斯の如く思考するの眞に止むなきを想ふ也。

四

實在の神は、無記默契の一境に、「空」として光耀し給ふのみならず、「生」として躍動し給ふ也。吾儕は空なる神の玄微に感じては禮拜せざらむと欲するも能はざる也。而

かも神の莊美なる生に觸れては愛慕せざらんとするも能はざる也。神は本來の實在也。而して又實に永遠の生命也。吾儕は實在の生命を認めて、始めて人生の意義と價値とを感ず。「此生は人の光なり」と直覺するを得れば也。嗚呼神は活ける實在にて座します也。讚めよ、畏れよ、愛せよ。

本來の我に歸りて、父なる神の懷に入る、其時吾儕は神をも忘れて神と一つなるの悦樂を覺えぬ。再び現實の我に歸る、其一轉瞬、仰いでア、神よと叫ぶ、其時よりして吾儕が心の奥に神の生は耀く也、其時よりして生の

力と美とは吾儕が心に満ち、人類社會に満ち、天地萬有に満つるの一大消息を了悟し得る也。無記の一境に神は實在し給ふ、而かもア、神よの叫びと共に、寂靜の神は忽然として生命を煥發し來る、ア、神よの叫び一つ、そこに盡きざるイシスピレーションの泉あり。そこに永しへに新たなるクリエーションの源あり。此の一つの叫びに醒されて、始めてカテゴリカル・イムペラチーフは無限の力を生じ、此の一つの叫びを放ちて、始めてアダムとイブの子孫は樂園を恢復し得たるを感ず。

五

「冥想は我と根本實在との心理的渾一を悟得せしむ。そこに本來の我あり、是れ神也。祈禱は我と根本實在との倫理的渾一を自證せしむ。そこに靈覺の心あり、是れ神也。本來の我といひ靈覺の心といふも、畢竟吾儕の本體たる人格自照の境涯に外ならず。冥想も祈禱もその極致に至りては、神と我との渾一體たる永遠の人格其者をして自ら光耀せしむる者なり。人格の美は之を求めて得べからず、只神を求むる者の上に自ら躍動し來らんのみ。

無記の一境に寂靜の神を樂しむ者は、自ら聖者の祝福を享くべし。無記の一境より躍動し來る生命の神の呼吸に觸れて、之と偕に悦び働く者は、永遠なる樂園の開拓者にして、同時に新しき文明の創造者たるべし。而かも寂靜の神に觸れずして、生命の神に仕へんは、素より徹底の宗教にあらず、吾儕は寂靜の光明の中に、生命の顯現を見る。

神を求むる人々よ。冥想せよ、祈禱せよ、吾儕は斯の如くして鮮かに本來の我を認め、而して其一機より、永しへに生ける實在の父なる神に逢ひ得たり。わが愛する

本来の我

二三

人々よ、來りて神に至るの道をこゝに求めむとは欲せざるか。(二九二、五)

萬有と神

萬有は神其者にあらずして、神の藝術品也。而かもそは天地の元始に於て創造せられたるには非ずして、無終なる永遠の世界に、絶えず創造せられつゝある無限大の藝術にてある也。神は萬有のカンパスの上に、時々刻々、新しき色と光の繪畫を描く。管に繪畫のみにあらず。そこには宇宙の音樂も奏でられ、そこには自然の殿堂も建てらる。神は萬有を繪具とし鍵盤とし資料として、無限の藝術を創造しつゝある也。總ての大いなる藝術は、

背後に人格の勢力を藏す。萬有の背後には即ち活ける神ありて存す。そは元始の造物主にあらずして、永遠の創造者也。そは幽玄なる思想家たるに止らずして、勤勉なる藝術家也。

眞に實在する者は、萬有にあらずして只神のみ。而かも神は一面萬有の姿を藉りて常に實在し給ふ也。萬有の姿は美しく、而かも姿に半ば現はれ半ば隠くる、神の心は、如何ばかり深く尊き者ぞや。

萬有より神へ、そこに一線の路は開かれてあり。萬有の偉大と美妙とを驚嘆措かざる吾儕は、より大いなる神

を懷うて、只恍然自失するのみ。

二

人の靈魂は無限の深みに通ず。神は靈覺としてそこに現はれ給はん。されど神はこゝにのみありと言ふべき者にあらじ。神は到る處に居まし給ふ也。然り萬有の總てに於て、神は自らを顯現す。總てが神也。否、神の姿也、神の言語也、神の思想也、神の藝術也。神は萬有に現はれて物質となる。物質を超越して別の世界あり。即ち意識の世界、精神の世界、深秘の世界あり。

り。されど客觀的に言へば、天地間只物質あるのみ。物質は神の愛子也。神は物質を造りて、後ち恐く愛子の獨創力に驚き給ひしならん。神より出でし物質は、神の愛子たるをも知らずして、幾億劫を濶歩し來れり。後ち意識の生れ出づるに及んで、物質は神の唯一なる愛子の資格を失ひ了んぬ。而かも後なる者の先きになるは、進歩の王國に於ける自然法也。物質は意識の前に跪いて、僕の禮を執るべくなりぬ。否、意識は物質を率ゐて、共に父なる神の前に子たるの愛を献ぐるに至りぬ。物質は意識によりて始めて目醒め、神より出でし秘密を知れり。

然り神現はれて物質となる。物質の中にも明かに神の思想あり意志あり生命あり。之を探究し味讀し發揮する、そこに哲學者藝術家宗教家の使命あり。否、人生最高の使命あり。

物質は肉眼に映ずる實在也、少くとも實在の顯現也。而かも之を分析しもて行けば、意識の精妙を以てしても量る可からざる存在となる。物質の極微に至つては、玄の又玄、妙の又妙、得て髣髴す可からざる也。而かも玄と妙とは茲に止らず。野となり山となり海となり空となる。物質の無限にして且つ無窮なるを思へば、肉眼に映

ずる現象の總てを以てしても、實在海中の一小滴と形容するの眞に止むなきを感せずんばあらず。極微と極大と、孰れか人の心を誘うて深秘の奥に入らしめざる。物質は神を背負うて立つ者也。否、神に背負はれて立つ者也。況んや萬有素と一元。萬有と現はれては千狀萬態、個性の差別極みなければ、之を還元し行けば、只是れ平等一味の大海、一よりして多、多よりして一、こゝにも深秘の門は開けぬ。又況んや在るが儘なる物質は、未だ嘗つて有らざりし生命となり意識となりて進化しつゝあるに於てをや。無機體よりして有機體へ、有機體よりして意

識體へ、進化の一路は自ら物質をして驚喜し且つ讚歎せしむ。

色も物質也、光も物質也、生命も亦物質也。或種の學者は斯く主張す。物質もこゝに至りては全く深秘の中に在り。あはれ物質の玄微と偉大と變幻と進化と、然り物質の限りなき深秘を味はゞ、誰かその背後に立てる實在の力に想到せずして止む可けんや。

神は物質を用ゐて宇宙の空間に萬有を描き出し給ひぬ。否、今現に描き出しつゝある也。無窮の藝術、永遠の創造、全能の神は讚むべき哉。

三

人類の社會も亦萬有の一片なり。而かも物質は醒めて意識生れぬ。意識生れて人文起る。萬有進化史の最後の頁は、即ち人類進化史の發端にして、神と萬有との關係は、之より全く一新しぬ。

萬有は神の創造になりて、而かも父なる神を知らざりき。今しも意識は生れ出で、神を自覺する時は來りぬ。萬有は人類の意識を通じて、神との深き情縁を懷ひ、神は人類の意識を通じて、萬有に對する父の愛情を鮮かに

發露すべくなりぬ。若し今人ありて一幅の肖像畫を描きたりとせよ、描き終りて恍然之を見凝むる時、畫中の人物聲を放ちて、「嬉しくも我を描き出で給ひし哉」と言はゞ、畫家其人の驚喜は果して如何に。人を以て神を測るも鳥辭ながら、人類の醒めて神よと叫ぶ時、神は自らの藝術の餘りに莊嚴美妙なるに微笑を禁じ得ざるべし。げにも神は物質を愛せしかど、物質は之を知らざりき。人類の生るゝに及んで、始めて神は父よと叫ぶ最愛の嗣子を得たり。

神は萬有の中に於けるよりも、一層高貴なる性質を、

人類歴史の中に於て顯はし給ひぬ。眞善美の愛の精神是れ也。歴史の中に生くる神、こゝに耶蘇の見たる神、耶蘇の身を以て顯はしたる神の根本眞髓は存する也。

歴史も畢竟神の藝術品也。而かも人類の眼は神に向つて開きしが爲めに、新に罪惡感を生じ、歴史てふ大藝術品は、宛然たる神人葛籐の活劇もて彩られたり。之を見て歴史に神なしといふは不信者の叫び也。此叫びに反抗して、歴史の中に耀ける神の生命を認め、信じて色讀せんとする、之を基督の徒とは爲す。

四

神は遍在す。神は愛也。神は希伯來民族に照臨し給へる如く。印度アリアン民族をも高天原民族をも光被し給へる也。然り神の力と恵とは確かに全地を掩へり。而かも神を見るの智慧に至りては、總ての民族必らずしも一様なりとは言ふべからず。人々個々の能力ある如く、民族も亦各々天才を有す。神を見るの明識に於ては、人類史上、孰れの國民か能く希伯來民族を超越し得たる。印度アリアンは宗教上に在りては東洋第一の天才民族

なりき。彼等の見たる神は、時として戀人たり、又時として朋友たり、又時として師主親たるの高調に達しぬ。而かもその最高調に至つてすら、彼等の神は終に多神教的傳習の感化を脱離する能はずして、統一の生命は濁され力なくせられぬ。希伯來民族の神は、その活ける力に於て疑もなく古今獨歩なりき。

希伯來民族の神は、ナザレの耶蘇に於て、始めて最高の表現を得たり。耶蘇は全能にして居まさる處なき愛の神を天日の如く朗かに人の心に示し給ひぬ。そは言説を以てにあらず、人格の力を以てなりき。耶蘇は人類史

上の最高頂に立ちて、人の理想を示すと同時に、神の榮光を彰はし、萬有を率ゐて神に至るの靈的運動を起さるぬ。耶蘇は永しへに新しき生命の發源地也、創造者也、耶蘇の徒たるは福なる哉。

五

神は萬有の中に、實在として、生命として、美として、法として光顯す。而して又歴史の中に、義として、愛として、文明として、人格として照臨す。歴史は萬有の花冠也。歴史の中に神ありと感じて、始めて一切は生動し

來る。

眼を開いて靜觀せよ。萬有と、歴史と、孰れか實在の活動ならざる、孰れか神の顯現ならざる。本來の我は、

此の一貫の生命の中に、眞善美の開發を樂しむ。

神は今に至るまで働き給ふ。吾儕も子たる神として小さき創造者たらざる可からず。然り生の藝術家として勞働せざる可からざる也。

生の藝術とは何ぞ。價值の創造是れ也。(一九二、六)

萬有と神

一三八

耶穌の人格と生命の創造

基督教の特質は何處にかある。耶蘇の人格と、その自己に對する關係とを外にして、何處にか復た之を求むべき。こゝに問題の中心あり。之を離れて基督教を理解せむと欲する、恐らくは是れ哲學的宗教的の遊戯三昧に墮せむのみ。至誠一徹の求道者は、須らく來りて而して觀よ、我儕は無花果樹の下に居る事寧ろ長きに過ぎたりき。若かず趨り赴いて、「我儕メシヤに遇へり」の驚異を頌たむには。

基督教に入るの門戸は東西南北に開かれたり。信眼一たび鮮かなれば、萬物皆是れ天啓なり。一切是れ皆聖書なり。されど求道の人に在りては寧ろ一切は緊縛なり、萬物は迷宮なり、苦樂は心を傷ましめ、善惡は魂を戦かしむ。然らば何處に平和の王國ある乎。眼を舉げて試みに見よ。一卷の聖書、そこに基督教の眞髓ありと第一の叫びは聞ゆ。げにもナザレの耶蘇の教訓にこそ基督教の奧義あれとは、一派の學者の力説する所也。然り、耶蘇の教訓は千古を空しうするばかり崇高偉大なる者にてありき。その中に含蓄せられたる眞理は、永遠の光輝を放

ちつゝある也。されど賢き詩人の謳ひし如く、いかに美妙なる言葉にてもあれ、そは確かに人の精神を半ば現はして半ば隠くす者なり。耶蘇の貴重なる教訓の背後には、より神聖にして、より權威ある古今獨歩の一大人格立てり。觀よ是れ其人也。教訓の字句に囚はれて、背後の人格を見ざるは、畢竟大河の末を汲みてその源泉を窮めざる者なり。基督教は文字の宗教にあらず、不立文字、教外別傳の妙機は、基督教に於ても確かに眞實にてある也。基督教の奥義は耶蘇の教訓其者よりも更に大いなる内容を有すとの見識は、茲に於てか自ら煥發し來る。

二

第二の叫び聞ゆ。曰く基督教の權威は、耶蘇其人の自己證明に在り、即ち自ら神より來り神と一つなりと宣言し給ひし耶蘇其人の自覺に在りと。げにも驚くべき自覺なりしかな、福音書の傳説に據れば、耶蘇はソロモンよりもヨナよりもダビデよりもモーゼよりも更に大いなる權威を有すと自ら信じて宣明し給ひき。我は神より來りし神の獨り子なりとは耶蘇の自己意識なりしか、或は初代教會の耶蘇に對する意識なりしか、歴史家として之を

吟味せむには、何等かの困難存すべきも、信者として眼を聖書に注げば、全篇皆是れ耶蘇の自信を立證すとも謂ひ得べき也。さらば吾等をして素直に耶蘇を信せしめよ。その絶倫なる自己證明をその儘にして信せしめよ。而してその結局は如何。

耶蘇は斯の如き超人にてありき、獨一の超人にてありき、人間界の物ともおぼえず神彩陸離たる超人にてありき。耶蘇は讚美すべき哉崇敬すべき哉。吾儕は斯く感悟するの餘義なき信仰状態に入らむ。而かも耶蘇の神彩を以てして、單に吾儕の信仰心を激勵するに止るとせば、

その價値は果して幾何かあらむ。そは單に人格の形を取れる神的藝術といふ外に、吾儕自身の生命と何の關係ありと加す可き。讚美の心は吾儕を清む、藝術の愛は我儕を高くす。而かもそは果して吾儕自身の生命を根底より清め高むる丈けの創造的活力を有するか。骨董店の觀音像も時として吾儕を感歎せしむ。感歎は靈魂刹那の飛躍なり。飛躍は一の創造なり。されど全人格を創造する丈けの大感動にあらざれば、未だ以て彼と我と生命の關係を結びたりとは言ひ得可からず。耶蘇の自信に對する尊敬、夫よりして耶蘇の神彩に對する讚仰、そは實に美し

く崇嚴なる宗教心の現はれにてはあれど、只夫れのみを以てしては未だ基督教の眞髓に觸れ得たりとは言ふ可からず。堂奥或は遠からじ、されど超ゆべき溝渠はあり。彼と我との生命の關係、猶ほ未だこゝに現はれざれば也。否、他の一面より見れば、耶蘇の人格の本來の權威は、猶ほ未だ之に現はれざればなりと謂ふの一層適切なるやも知れず。耶蘇の人格の權威は讚仰より更に一步を進めて、我儕各己の人格に大革命を來らしめ、地震の後の廢墟より立ち新しき殿堂を建つるの精神的奇蹟を現はさずんば終に止まざる者なれば也。無關心より讚仰へ、讚

仰より愛へ、耶蘇は我儕を導き給はん。愛は人格の大死なり、復活なり、新生なり。愛によりて彼と我とは一體となる。而して後ち始めて基督教の奥義を知る。

三

特に基督教を信すといふは、さらば何事の謂ひなる乎。處女降誕、肉體復活、三位一體説といふ如き教理を知解する是れなるか、曰く否。神即天父、萬民同胞といふ如き思想を受け容るゝの謂ひなるか、曰く否。基督教を信すといふは、耶蘇の人格に觸れて、新に生れたりとの實

驗を握る是れ也。換言すれば耶穌と愛の關係を結ぶ是れ也。救ひとは畢竟之を指す者に外ならざる也。一切の教義、一切の神學、乃至一切の基督教的思想信仰は、此根本源泉より溢れ出でし者、又溢れ出づべき者なり。吾儕が基督教に在りては耶穌を愛するは殆んど一事にして萬事也。神と人との深奥微妙なる關係も畢竟之によりて了悟し得べし。假令耶穌は總てを愛し給ふとも耶穌を愛する能はざる者は、永しへに基督教の門外漢なるべし。方今の識者なるもの、多くは神を人格と見るべきか將た非人格と見るべきかの疑問を以て、宗教上の大問題となせ

ども、斯の如きは全然哲學的思辨の問題のみ。少くとも求道者に取りては二義三義の枝葉問題のみ。基督教に於ける第一義は、耶穌との關係是れ也。耶穌を知れば萬疑解かる。若き求道者は、老いたる群小哲學者に伍して、論理的葛藤に耽るよりも寧ろ直ちに來りて古今第一人の神彩に觸るべき也。

四

こゝに至りて人或は疑ひ言はん。耶穌は一千九百年前の人にあらずや、如何にして將た何處に於てか彼の人格

に觸るゝを得んど。げにも耶蘇てふ人物は一千九百年前に在りき。而して彼は十字架上に死しぬ。今人を知る既に難し、況んや古人を知るに於てをや。耶蘇の人格を髣髴する蓋し容易の事業に非るなり。然らば是れ果して不可能事なるか。曰く否。

耶蘇は十字架上に死しぬ。而かも直ちに弟子達の精神に復活し、世々國々の信者の心に蘇生したり。十字架上の耶蘇を見て、彼を死せりと信じたるは猶太人の大いなる謬見なりき。耶蘇は長しへに活くる也。是故に耶蘇の人格は初代クリスチャンの信仰を反映せる四福音書に現

はるゝと同時に、中世紀に於ける聖者信徒達の思想信仰にも現はるゝ也。否、そのあらゆる變化を以てして、近世基督教徒の思索と生活と信念とにも、耶蘇の人格は現はるゝ也。耶蘇の人格は、夫れ自身に於て、久遠の創造力、無限の生命力也。初代クリスチャンの理解せる處は恐らく其一部分なりしならむ。中世僧徒の理解せる處亦恐らくは其半面なりしならむ。近世思想家の探索し想像する處亦確かにその全體とは言ふ可からず。耶蘇の人格はその孰れにもあらずして、實は歴史を貫通して絶えず其生命を開顯し行く最高精神其者にてある也。耶蘇の人

格は、一千九百年の昔、ユダヤの野に於て開顯し盡されしに非ずして、一千九百年を通して、今も猶ほ新に開顯せられつゝある最高精神其者にてある也。故に耶蘇の人格を尋ぬるは考古學者の職分にあらずして、全く人類最高の精神を味ふ丈けの能力と志望とを有する求道者の使命にてある也。或る意味に於て、吾儕は耶蘇の人格を自ら創造し行く者なり、否、永遠の昔より準備せられ、而して一千九百年前、ナザレに生れ出でし耶蘇の人格は、自ら泉の源頭となりて人類の中に新しき生命の流を湧かしめ、吾儕は今現にその流の中に游泳しつゝ、自らの人

格を通して、何等か新しき或物を之に貢献せんとするなり。斯くして眞摯なる求道者は自ら終に新しき預言者なるべし、而かも泉の源頭に觸れずば、吾等が生命の流は到底豊富なるを得ず。吾儕にして驕慢不遜の念に驅らるる事なく、眞に嬰兒の心を以て、歴史の潮流の中に耶蘇の人格を求めば、必らずや信眼鮮かに「其人」の神彩に觸るるならむ。嬰兒の如く、歴史の中に、是れ吾儕の標語なり。而かもその結局は、畢竟我と彼とは一つ也、基督我に在りて生くの大回心を透過し來りて、始めて耶蘇の本體を知り、その永遠の生命なるを知り、而して同時に

自己てふ者の意義と價值とも知る可き也。

耶穌の秘密は深く且つ大いなり。來りて之を觀る者は、一切の哲學を空了するも、此一人格に離れじとの愛を煥發するに至らむ。耶穌の人格は世界文明の眼目也、精靈也、生命也。日本國民が彼を解すると否とは、恐らく日本文明の死活問題ならむ。(一九二二年クリスマス)

自然詩人を憶ふ

搖籃の夢幼き頃より、予は自然を慕ひたりき。青春都城の塵に老いて、久しく戀に背きしかど、若葉の露に戦ぐ涼風、眞垣を繞る蛙の聲、都も夏の景色たちては、轉ろに自然を憶ひいで、予は愛慕の思にくれぬ。戀を離れて予は久しかりき。心は荒み涙は涸れて、世の煩ひに身も瘦せたり。予は大都會の眞中に在りて、馬車絡繹の音に慣れたれども、孤心の寂寥は堪へがたかりき。微妙くもバイロンは謳ひけるかな。時と人どに容れられざりし天涯漂泊の放浪兒こそは、げに予が會心の友なりき。巖に踞し、森を分け、鳥も通はぬ山を攀ち、人影遠き谿

間に入るとも、予は寂寥を怖れざらん。

This is not Solitude ; 't is but to hold

Converse with Nature's charms, and

View her stores unroll'd.

されども都城の中に立ちて、衣は黄塵に汚れ、眼は虚榮に眩され、耳は偽善と曉舌とに殆んど困殺せられんとしては、游子の情懷果して如何。人は利欲の奴隸となりて、心に悠々の天地無く、尊き詩神の祭壇も空しく塵埃に埋れ畢んぬ。美しさも微笑も、無垢の信も、今や都城の中に無し。禍なる哉予は心眼の味むを忘れて、久しく

虚榮に酔へるなりき。醒めて周囲を顧みれば、予は墳墓の邊に立てり。活ける骸骨の蠢動する文明の廢墟に立てる也。眞の孤獨は是れならずや、眞の寂寥は是れならずや。"Cities give not the human senses room enough." 予は嗟嘆の聲を洩しつゝ、新生活を慕ふべくなりぬ。

孟夏七月、梅雨全く霽れて、綠葉影濃かに、碧の空は奇峰聳えて、潮の響に清韻多し。噫われ若き夢を趁うて、初戀の自然に歸らんは今か。あはれ解脱の縁を捉へんとして、瞑想の淵に立てる予は、宛がら憐れなるスーザン (Wordsworth's The Reverie of poor Susan.) の恍惚として生れし山

河を想ふなりき。げにも憐れなるスーザンよ、彼女は緑樹街頭を歩いて、偶然草雲雀の啼くを聴きぬ。清婉の聲なりしよ、神秘の歌なりしよ。朝の市街の寂寥を破りて囀る小鳥は天使なりき。驚いて店頭に立てるスーザン、彼女の眼に映じ来るは、げに慕はしの幻影なりき。山は青し、森は黒し、薄靄は黛を描くに非ずや、小川は谿間を流るゝに非ずや、緑の牧場あり、牧場の傍に小舎あり、而して寂しげなる此小舎こそは、彼女が渾身の愛を献ぐる地上唯だ一の樂園ならずや。スーザンは眺めぬ、彼女は恍惚たりき。されども幻影は忽焉として消えぬ。靄も

流も、園も、總ては杳然たる幻影なりき。憐れなるスーザンよ、予は屢々爾の如き感念を以て市街の真中に立つ者也。爾の如き刹那の歡樂、爾の如き無量の悲痛は、予も亦屢々實驗したる所。而して予は今幻影の跡を趁うて、自然の愛に歸らんと欲す。爾を描いて世に遺せるグラスミア湖上の詩聖は、復た幸に予を導いて久遠の安息に入らしむるならん。「エホバは我を緑の野に伏させ、憩ひの水濱に伴ひ給ふ、慕はしめよ、行かしめよ、憩はしめよ、自然は予が友也、予が戀人也、否予が靈魂の救主也。巖の一片、山の一角、予は爾を慕ふ毎に、心無量の慰安

を覺ゆ。げにも賢しきコンコオドの哲人よ。「The mind loves its old home : as water to our thirst, so is the rock, the ground, to our eyes, and hands, and feet !」

予は自然を愛する如く、また自然詩人を愛す。此故にバイロンを愛する予は又ウォルツオスを離るゝ能はざる也。何故にウォルツオスを愛する乎、予は嘗つて自ら之を問ひぬ、而して答は單純なりき、曰く「自然の友なる故に」。マーシユ、アールドはウォルツオスを擧げてバイロンの上位に置ける人也。試みに彼の評論を聽け。「ウォルツオスは人間の歡樂と慰藉とに就て、久遠の源泉を悟得

したりき、而してバイロンは然らざる也。ウォルツオスの詩は、バイロンよりも遙かに優りて、人をして永遠に信頼す可き或物を享樂せしむとは、是れアーノルドの評論なりき。予は今二者の優劣を定めんと欲するに非ざれども、ウォルツオスの詩中には、確かに永遠の慰安あり。而して此慰安こそは、自然の中より觀得したる神の恩愛には非る乎。想ふにウォルツオスの見たる神は人間の姿を通してよりも、寧ろ自然の中に現じて、静和、温藉、森嚴、高崇の善徳を詩聖の心に植ゑたりき。噫憐れなるスーザンの予は、詩聖の腕に導かれて、自然の堂に登ら

んとする今、天颺一陣吹き落ちて、靈眼豁然として開くを覺えぬ。試みにウォルツオスを携へて、自然の堂に登れ。何人か “We are laid asleep in body, and become a living Soul.” の感なき者ぞ。而して一度醒めたる靈魂は、單に森の色、山の立すまひに美感を擅にする而已ならず、やがては詩聖と諸共に、

“I have learned

To look on nature, not as in the hour

of thoughtless youth; but hearing often times

The still, sad music of humanity.”

自然詩人を憶ふ

静寂悲壯なる人道の樂音を聞くに至らん。斯くてこそ
讚歌は自然に献せらる可し。

“Well pleased to recognise

In nature and the language of the sense,

The anchor of my purest thoughts, the nurse,

The guide, the guardian of my heart, and soul

Of all my moral being.”

愛は眞實を知る鍵也。ウォルツオスの自然崇拜は、彼
をして自然の眞實——神の天啓——を悟らしめぬ。予は時と
して自然詩人たらんと欲す。然れども神は天才詩人を下

して、既に自らを顯現したりき。吾等は拙き詩筆を弄ば
んより、寧ろ詩聖の伴侶として、自然の香氣を愛樂せん。
予は復た嘗つてバイロンの友となりて、飄浪の春を重
ねたりき。偉大なるバイロンよ、彼は舵なき破船の如く、
信を繋ぐ可き岸なくして、勇者の悶死を遂げたれども、
彼亦自然の友たりき。若く雄々しきチャイルド、ハロル
ドは昂然として虚榮の都府を睨み、弦聲高く弾じて曰く、

“And to me

High mountains are a feeling, but the hum

Of human cities torture:”

嗚呼ハアロルド、彼の氣魄は雄大なりき、奔放なりき、
憐れなるスーザンに泣ける予は、放浪貴公子の豪語を聽
いては、常に躍然として歡笑する也。ウォルツオスの自
然は、人をして瞑想の清興を辿らしめき。ウイー河畔の
巉巖に踞して、彼は默思を凝して曰く、

“While here I stand, not only with the sense

Of present pleasure, but with pleasing thoughts

Than in this moment there is life and food

For future years.”

バイロンの自然は常に活動す、彼の自然は沈黙の自然

に非ずして、全く雄辯の自然なり、熱情の自然なり、チ
ヤイルド、ハロルドは即ち謳うて曰く、

Where rose the mountains, there to him were friends;

Where roll'd the ocean, thereon was his home;

Where a blue sky, and glowing clime, extends,

He had the passion and the power to roam.

されどもバイロンはまた静寂の美を知らざりしに非ず、
路なき森に分け入りて、快樂こゝに在りと彼は謳ひぬ。
淋しき渚を徜徉うて歡喜こゝに在りと彼は語りぬ。人影
の劫初より絶えたるところ、彼は社會あるを知り、底ひ

もわかぬ海を窺うて、吼ゆるに似たる潮の音に、彼は太古の音楽を聞きぬ。只予バイロンを読む毎に、自然を慕ふこと轉た深うして、而かも人界の離れ難たなき、またバイロンに似たるを憾む。

ワルデン沼畔の理想家も亦予が愛する人物なり。嗚呼「誰か自然オースター、オプ、チー、チー、ユアの記者たる者ぞ、神とラルフ、ワルドオ、エマアソンなりとは、文學界の通語なれども、我がヘンリー、ソローの如きは、また稀代の自然記者なりき。ハミルトン、メービーは彼を呼んで “A born lover of Nature” と爲し、復た彼女の “Self-appointed secretary” と名けぬ。然りソロー

は自然の情人なりき。而して亦同時に彼女の秘書官なりき。秘書官は時として其人多からん。而かもソローは自然の愛慕者にして、又彼女の唯一なる情人なりき。彼は「ワルデン」に記して曰く、“I have my own sun and moon and stars, and a little world all to myself.” 彼は自然を私するまでに、自然に愛着して離れざりき。人間の棲む家とては、地平線上に見るべくもあらぬワルデン沼畔の森に隠れて、彼は自然を友としたりき。蛙の啼くも、虻の呻りも、そばつ雨も、荒ぶ嵐も、彼には瞑想の資料となりて、無量の歡樂を興ふるなりき。誰か霖雨を喜ぶ者あらん、ソローは

獨り莞爾として曰く、「予の最も楽しき時は、嵐交りの長雨なり。朝な夕な垂れ籠めて聞く雨粒の音、風の響きは、わが心を和げ慰ましむ」と。彼は寂寥の味を知る、單獨は彼の苦痛にあらず、彼は自然と共に在れば也。彼曰く、
 “I love to be alone. I never found the companion that was so companion-able as solitude.” 彼は寂寥の中に永遠を感じ、岩石と森林の間より、神の呼吸を覚めたりき。偏僻なる個人主義者として、漫りに彼を貶する勿れ、彼は極端なる理想家として不滅の生命を具ふるなりき。ブラッドフォード、トオリー彼を評して曰く、若しモンテレーヌにして社會と交友

との爲に生れたりとせば、ソローは瞑想と寂寥との爲に生れたる也と。然りソローはこの瞑想と寂寥とを通じて、無窮に心を繋ぎしなりき。心の飢えたる人は『ワルデン』を読み、『コンコオドの一週間』を読み、而して彼の『日記』を読み。彼と共に森を歩まば、若葉の戦ぎにエオリアンの歌を聞くべし、彼と共に巖を攀ちなば老いたる自然も莞爾として、昔語を囁くならん。あはれ自然の中には長しへの “Sweet and beneficent society” あり。予が行くべきは自然の家なり、予が求むるは自然の愛なり。短夜の夢覺めなんとして、予は初戀の蘇生に逢ひぬ。噫、自然

自然詩人を憶ふ

一七二

は予を俟てり、初戀は予を俟てり、慕はしめよ、行か
しめよ、而して長へに戀はしめよ。げに予は人間を愛せざ
るに非ず、自然を慕ふこと深き也。

“I love not man the less, but Nature more.”

光を慕ひて終

光を慕ひて：

□定價 四拾錢

著者 小山 東 助

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

發行者 福永 文 之 助

續濱市太田町五丁目八十七番地

印刷者 村岡 平 吉

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

發兌 警 醒 社 書 店
振替東京五五三(電話新橋一五八七)

不許複製

大正二年四月一日印刷
大正二年四月四日發行

福音印刷會社發行

吾人は尙基督教徒たり得る乎

イエナ大學教授オイクン博士が最近天下に發表したる信仰告白也。近代文

明は基督教と衝突し、殆ど之を否定し去らんとするにも拘はらず、基督教

は猶依然として、存在の權利を有することを述べ。學界の大文字也。

著 ンケイオ・フルドル

譯 君助之鹿賀額

□定價七十錢 郵税八錢

聖

者

小吹

野田

村佳

林藏三

君君
譯

アルプスの寒風も、こゝに吹きては薔薇花の香を孕み、地中海の怒濤も、こ

ゝに寄せては煙霞の夢を結ぶといふ、南欧の美國伊太利半島は、げに詩に

充ち夢に満つ。その詩と夢と情は、凝つて一篇の「聖者」となりぬ。

深奥の理想は、悲しき戀の惱みと相打ち、相亂れつゝこゝに波瀾を生じ、

曲折を生む。眞に是れイタリイ文學の精華にして、ネオ・ロマンテシズムの

先驅なり。

□定價一圓五十錢 郵税十二錢

魔ケ沼

渡邊千冬君譯

魔ケ沼は、フランス閨秀作家のゾロルツユ・サンドの傑作マアル・オウ・ディ
アブルを和げたものである。

うるはしい自然を背景に、清く美しい戀を描いた極めてゆかしき小説であ
る、田園小説の白眉である。

サンドは佛蘭西婦人の天才である。されば、その筆端は人情の機微に觸れ、
心的描寫に至つては、さすがは、柔しき女性——天才者ならではのこもも
るゝところがある。巻頭に挿入せる、岡田三郎助畫伯の筆になる、魔ケ沼
主人公の清麗なる肖像は、この小説に花をひらいてゐる。

□ 定價 七十錢 郵税 八錢

獨立短言

內村鑑三君著

本書はかつて舊「東京獨立雜誌」に掲げられたる、論文、短文、を蒐め、
之に著者の嚴密なる校訂を加へて、一書となしたるもの、その獨立を教へ、
その革新を教へ、その謙遜を教へ、その義を教へ、その信を教へ、その
愛を教へ、特に靜かに、しかも強く人を神に導くに於て唯一の書なりま
信す。

□ 定價 五十錢 郵税 六錢

八 當 ッ 集

向 軍 治 君 著

島村抱月氏對魚住文學士の誤譯問題を提げて、混沌たる文壇に鐵槌を加へ、帝制に側杖を喰はせ、中學高等學校及大學の教育の大缺點を指摘して、文部省に肉薄し、英語、獨逸語及諸種の邦譯を列舉して、詳細なる説明を加へ、中學以上の學生に警告を與ふる向氏一流の快文字に充つ。攻撃の論法を學ばん人、語學を愛する人、殊に翻譯に従事せらるる人は一覽を要す。

□ 定價 三十錢 郵稅 四錢

久 遠 の 基 督 教

小 山 東 助 君 著

□ 著者は佛、教、意、識、と希臘、恩、潮、と基督、教、的、信、仰、とを一心に融會せんとする第三王國の仰慕者なりき。

□ しかも羊腸の路を辿りて、今や高嶺の一角に立ち、耶穌その人の宗教に於て、久遠の光明を發見しえたり。

□ 本書はその實驗に基いて、基督教の本義を説ける一大獅子吼也。

□ 若き人々よ、一思想を愛する人々よ、清新の想、優婉の筆に接するべく、本書を繕きたまへ。

□ 定價 壹



郵稅 十二錢



人 生 と 文 学

著者 内ヶ崎三郎君 文学士

- 1 理想的雄辯家の標準
- 2 傳記文學の推奨
- 3 チャールズ・スキング
- スレイを論ず
- 4 ラスキンの修養時代
- 5 雄辯家としてのトマス
- カアライル
- 6 清教主義とジョン・バンヤン
- 7 カロリン・ハーシ
- エル
- 8 近代英米宗教家の面影
- 9 ソローの「ワルデン」
- 10 偉
- 大なる生涯の轉機
- 11 アルプス山の畫工ツエー・パンニイ・セガンチ
- ニイ
- 12 猪苗代湖
- 13 兩羽の自然と人
- 14 吾庭の春
- 15 薫

風清香録

□ 特價 五十錢 郵税 八錢

終

